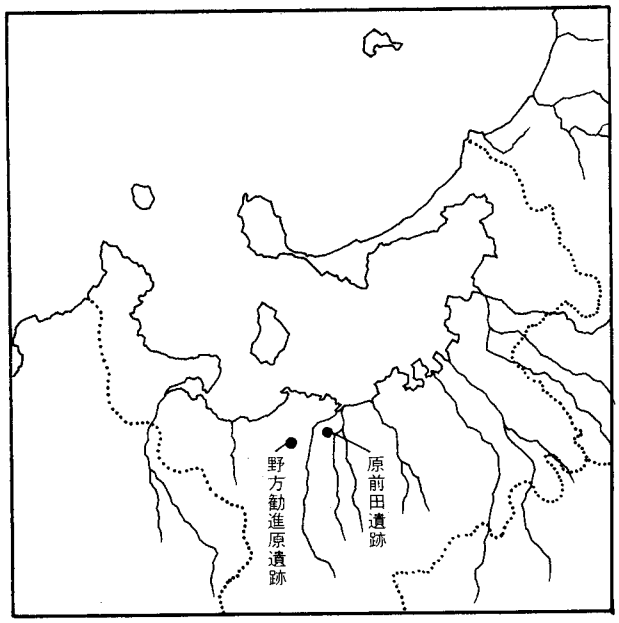
福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
—Ⅰ—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集

1981

福岡市教育委員会

福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
—Ⅰ—



福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集

1981

福岡市教育委員会

序　　文

本市西部地区における都市化の伸展は著しいものがあり，宅地化の傾向が一段と早まりつつあります。

教育委員会ではこれらの開発により消滅を免がれない埋蔵文化財については，事前の発掘調査を実施し記録保存に努めています。

この報告書は本年度国庫補助事業で西部地区において実施した野方勧進原遺跡，原前田遺跡，飯氏ゾウサ遺跡のうち，野方勧進原，原前田遺跡に関するものです。

国庫補助事業による西部地区の調査は従来から有田，小田部周辺地区，四箇周辺地区として継続しているところですので，上記以外のものについては，まとめて報告書を作成することといたしましたが，本書はその第1分冊にあたるものです。

調査に際し地元関係者をはじめ，多くの方々の協力をいただきましたことに対し，心から感謝の意を表します。

本報告書が福岡市の文化財保護の面から広く御活用いただくとともに，学術研究の分野においても役立つことを願うものです。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　津　茂　美

例　　言

1．本書は，福岡市教育委員会が昭和55年度から国庫補助事業として実施している福岡市西部地区（樋井川以西の福岡市域）の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．本書には，昭和54年度調査の野方勧進原遺跡および，昭和55年度調査の原前田遺跡の調査記録を収録した。

3．遺跡実測図中の遺物番号は，各遺跡毎の通し番号であり，番号表記にあたっては，以下のように遺物の器種分類に従って通し番号を符した。

　土器……P，石器……S，鉄器……I，ガラス製品……G

4．挿図の遺物番号は，写真図版中の遺物番号に一致する。

5．本書で使用した地図は，国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」N1－52－10－11，および5千分の1福岡都市計画図№91，92，104，105の一部である。

6．本書の作成にあたっては，各遺跡の発掘担当者が分担して行ない，福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第二係が編集・総括した。

本　文　目　次

野方勧進原遺跡

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至るまで……1
　2．調査の概要……2
Ⅱ．遺跡の位置と環境……3
　1．遺跡の位置……3
　2．周辺の歴史的環境……3
Ⅲ．調査の記録……8
　1．遺跡の概要……8
　2．竪穴住居址……10
　3．溝状遺構……23
　4．掘立柱建物……26
　5．竪穴遺構……28
Ⅳ．まとめ……33

原前田遺跡

1．はじめに　1）調査に至る経過……35
　　2）立地と環境……35
2．調査の記録　1）調査の概要……38
　　2）検出遺構……38
　　3）出土遺物……39
　　4）まとめ……40

挿　図　目　次

野方勧進原遺跡

Fig.　1　周辺主要遺跡分布図　5万分の1……4
Fig.　2　野方勧進原遺跡地形図　5千分の1……9
Fig.　3　1号住居址実測図　60分の1……11

Fig. 4　1号住居址出土遺物実測図 I　3分の1……12
Fig. 5　1号住居址出土遺物実測図 II　1分の1……13
Fig. 6　2号・3号住居址実測図　60分の1……14
Fig. 7　2号住居址出土遺物実測図 I　3分の1……15
Fig. 8　2号住居址出土遺物実測図 II　3分の1……16
Fig. 9　2号住居址出土遺物実測図 III　2分の1……17
Fig. 10　3号住居址出土遺物実測図　3分の1……18
Fig. 11　4号住居址実測図　60分の1……19
Fig. 12　4号住居址出土遺物実測図 I　3分の1……20
Fig. 13　4号住居址出土遺物実測図 II　1分の1……21
Fig. 14　5号住居址実測図　60分の1……22
Fig. 15　5号住居址出土遺物実測図　3分の1……23
Fig. 16　弧状溝実測図　60分の1……24
Fig. 17　弧状溝出土遺物実測図　3分の1……25
Fig. 18　コの字形溝実測図　60分の1……25
Fig. 19　コの字形溝出土遺物実測図　3分の1……26
Fig. 20　1号・2号建物実測図　60分の1……27
Fig. 21　3号建物実測図　60分の1……28
Fig. 22　3号建物出土遺物実測図　3分の1……28
Fig. 23　1号・2号竪穴遺構実測図　40分の1……29
Fig. 24　2号竪穴遺構出土遺物実測図　3分の1……30
Fig. 25　各ピット出土遺物実測図　3分の1……31
Fig. 26　各ピット・表土出土遺物実測図　1分の1……32
付　図　野方勧進原遺跡遺構配置図　200分の1

原前田遺跡

Fig. 1　周辺地形図　1万分の1……36
Fig. 2　北壁土層断面図　80分の1……36
Fig. 3　Pit 5 実測図　40分の1……38
Fig. 4　Pit 8 実測図　40分の1……38

Fig. 5　遺構配置図　300分の1 ……37
Fig. 6　遺物実測図　3分の1・6分の1 ……39

図　版　目　次

野方勧進原遺跡

PL. 1　上；　野方勧進原遺跡遠景（北西から）
　　下；　野方勧進原遺跡近景（南から，調査終了後）
PL. 2　上；　1号住居址完掘状況（南から）
　　下；　1号住居址完掘状況（南から）
PL. 3　上；　1号住居址完掘状況（西から）
　　下；　2号・3号住居址調査状況（東から）
PL. 4　上；　2号・3号住居址調査状況（北から）
　　下；　2号・3号住居址完掘状況（北から）
PL. 5　上；　4号住居址完掘状況（西から）
　　下；　4号住居址完掘状況（北から）
PL. 6　(1)；　4号住居址土坑遺物出土状況
　　(2)；　4号住居址内ピット遺物出土状況（西から）
　　(3)；　3号建物柱穴内遺物出土状況（西から）
　　(4)；　5号住居址完掘状況（西から）
PL. 7　上；　5号住居址完掘状況（北から）
　　下；　コの字形溝完掘状況（南から）
PL. 8　上；　コの字形溝土層断面Ⅰ区（南から）
　　中；　コの字形溝土層断面Ⅱ区（東から）
　　下；　コの字形溝土層断面Ⅲ区（南から）
PL. 9　上；　2号・3号住居址および弧状溝（東から）
　　下；　1号竪穴遺構（南から）
PL. 10　上；　1号竪穴遺構（北西から）
　　下；　2号竪穴遺構（北から）
PL. 11　　1号・2号住居址出土遺物　(1/3)

ＰＬ．12　　２号・３号・４号・５号住居址，弧状溝出土遺物　（1/3）
ＰＬ．13　　コの字形溝，３号建物，各ピット出土遺物　（1/3）
ＰＬ．14　　各遺構出土石製品・鉄製品・ガラス製小玉　（2/3）（1/1）

原前田遺跡の調査

ＰＬ．１　上；　遺跡全景（調査前）
　　下；　遺跡全景（調査後）
ＰＬ．２　上；　遺構検出状況（西北隅）
　　下；　出土遺物　（５～８・11～14；1/3，９；1/6）

表　目　次

Tab.　1　野方勧進原遺跡周辺調査遺跡一覧表
Tab.　2　ガラス製小玉計測表
Tab.　3　野方勧進原遺跡出土遺物一覧表

野方勧進原遺跡の調査

Ⅰ．はじめに

1．調査に至るまで

早良平野の西縁には，叶嶽～長垂山山塊から派生する舌状台地が展開している。これらの台地上には早良古墳群と総称される後期群集墳をはじめとして，国指定史跡である野方中原遺跡など数多くの遺跡が点在しており，早良平野の古代史を語る上で重要な地域を形成している。しかしながら人口の集中化に伴ってこの地域の各種開発は著しく増加しており，今回の調査もこうした傾向が一つの契機となっている。

昭和53年11月3日に，西区大字野方字勧進原388番地1他1筆の開発事前審査願が文化課へ提出された。開発申請地（開発面積　2934.92 ㎡）はそれまで農地として利用されていたが，宅地造成を行ない個人専用住宅を建設するというものであった。申請地はその時点までは遺跡として認知されていなかったが，周辺の遺跡分布の在り方，地理的・地形的条件等から勘案し何らかの遺跡が存在することが書類審査によって予想された。これに基づいて11月29日に申請地の現況および遺物の散布状況を把握するために現地踏査を行ない，あくる昭和54年1月29日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺物の出土量は少ないものの，弥生時代後期前後の遺構がかなり濃厚に包蔵されていることが確認され，開発に先行して何らかの保存上の措置を講じる必要があると判断された。福岡市教育委員会ではこの試掘結果を踏まえて，開発申請者江崎芳郎氏との間で，保存上の問題をも含めて，開発および調査上の諸問題等について数回の協議を行なったが，造成工事による遺跡の破壊は避けられないこととなり，発掘調査による記録保存の措置が必要となった。その結果福岡市教育委員会は，国庫補助を受け申請地内の発掘調査を実施することとなった。

調査組織および関係者は以下のとおりである。調査にあたって多大の協力を得ました。記して感謝の意を表します。

調　査　組　織

調査主体	福岡市教育委員会
	文化部文化課埋蔵文化財第二係
調査事務	岡島洋一
調査担当	塩屋勝利　田中寿夫
調査協力者	

渡辺和子（調査補助）　原田順子（整理補助）　山下敏　山下才一郎　米島茂臣　石崎義輔　庄野崎チタカ　田中ツネ　立花ナミ子　米島シズ　柴田シゲ子　松石ヨシ　曽根田スエ　米島敏江　米島チズヨ　徳永千鶴子　和田幸代　松下良子　井上真由美　藤キミエ　股野安枝

富田玲子　富田礼子　坂本正子　池弘子　野上喜美子　坂田セイ子　松井冬子　小林ツチエ
小林アキエ　山本キクノ

2．調査の概要

発掘面積は開発面積の約90％にあたる約2600㎡である。調査は昭和54年12月10日～昭和55年4月19日までの約5ヶ月にわたって実施した。その間報告書作成業務の都合上調査を休止した期間（2月12日～3月8日）がある。したがって調査に要した実質的期間は約4ヶ月（実働日数65日）であった。丁度厳寒の季節にかかり，降雪と雨に悩まされ調査は困難を窮めたが，調査中事故もなく無事終了することができた。以下調査の経過と方法について述べる。

12月10日　発掘調査の作業安全を祈願し神式にのっとり地鎮祭を行なう。

12月11日～13日　南北の方向を基軸とする10m方眼を調査区全域にわたって設定。南北方向に算用数字，東西方向にアルファベット大文字を符し，北西隅の交差点をグリッド名とした。（調査時に便宜的に用いたが，本書では不必要と考え用いていない）

12月14日～27日　先に設定したグリッドを基礎にして約500㎡毎に調査区を6分割（A～F区の6区）し調査を行なうことにした。この期間は調査区北東部にあたるA区の遺構検出・露呈作業を行なった。遺構名は検出された順序に従い，遺構の種類毎に通し番号を符して呼称した。検出遺構は1号竪穴住居址，1号・2号竪穴遺構ピット232個がある。竪穴住居址，竪穴遺構は掘り方内部の土層堆積状況および遺物の出土状況・層位を明らかにするため四分法による掘り下げを行ない，東北部分から時計回りにⅠ～Ⅳ区の名称を符した。

1月7日～2月9日　A区の遺構実測作業に並行しB～D区の調査を行なう。B～D区は調査区の中央から西側部分にあたり，遺跡の立地する台地の落ち際近くに該当する。性格不明の土坑が多数みられた地区であり樹根による遺構面の攪乱が著しい。平面的にみて柱穴掘り方と思われるものについては，掘り方内を検出面から深さ5～7cmほど一旦掘り下げ柱根痕跡の有無を確めた後，掘り方を露呈した。

2月12日～3月8日　調査報告書作成のためこの間発掘調査は休止する。

3月10日～4月19日　残るE・F区の調査，B～D区の遺構実測，各遺構の写真撮影，竪穴住居址床面上埋土の水洗選別作業等を行なう。E・F区は調査区の中央から南東側にあたり，遺構がまとまって検出された地区である。住居址3軒，溝状遺構（弧状溝1条，コの字形溝1条）2条，掘立柱建物2棟が検出された。A区実測中に，新たに掘立柱建物が1棟確認される。遺構・土層断面図は20分の1に統一。4月19日に調査終了反省会をし，器材を撤収。

II．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

野方勧進原遺跡は，福岡市の西郊，福岡市西区大字野方字勧進原 388番地に所在し，国土地理院発行二万五千分の一地形図福岡西南部図幅の北西隅より東へ12.2cm，南へ25.8cmの交点上に位置し，地形的には早良平野の西縁部に当る。早良平野は広義の福岡平野の西部を占め，西方の糸島平野とは，背振山地より派生して北方へ突出する長垂山山塊によって限られる。旧早良郡内野付近を要部とし，室見川を中心河川として開析され，博多湾に向かって扇形に展開する複合扇状地の平野であり，西南部地域は室見川の支流をなすいくつかの小河川の開析による扇状地が発達しており，肥沃な農業地帯となっている。

本遺跡は，この長垂山山塊の東北部の位置を占め，標高 382.4mを測る飯盛山から分岐して舌状にのびる丘陵上に立地する。この地は飯盛山北麓に水源を発して野方，拾六町，下山門付近を北流して今津湾に流入する十郎川上流に西面し，標高は30mを測る。西側には谷水田が営まれ，水田面との比高は約 8.5m，東側の谷は灌漑用の溜池が造成されている。

2．周辺の歴史的環境

本遺跡を含む早良平野周辺は，近年までは福岡市近郊の農業地域であり，豊かな田園風景が展開されていた。しかしながら，1960年代後半以降，国道建設，区画整理事業，大型団地建設，さらには地下鉄建設などの各種開発事業が急激に増加し，福岡市随一の人口集中地域を形成しており，海岸部はもとより，平野周辺の丘陵地帯や内陸部までに市街地は拡大しつつある。これら一連の開発事業の進展に伴い，埋蔵文化財の緊急発掘調査件数も増大の一途を辿り，その結果，平野周辺の歴史的環境が次第に明らかにされつつある。本遺跡周辺の歴史的環境については，これまで公刊された埋蔵文化財発掘調査報告書に数多く詳述されているので省略するとして，以下，周辺の発掘調査の略史を述べる。

有田遺跡調査以前

早良平野周辺の考古学的調査の歴史は，1967年～1968年の２年次にわたり，九州大学考古学研究室を中心として行われた有田遺跡の調査を大きな節目として，前後に区分できる。有田遺跡調査以前におけるこの地域の考古学的調査は，戦前の史蹟名勝天然記念物保存法に基づき，福岡県が実施していた古蹟調査の段階と，戦後の1950年に制定された文化財保護法に基づく文化財保護行政下の調査段階を含んでいるが，旧法下における埋蔵文化財の発見・調査は，組織的な発掘調査は皆無であり，その件数もわずかである。戦前において知られていた遺跡は，弥生時代前期初頭以降の甕棺墓，古墳時代前期の箱式石棺墓などの墳墓遺跡である藤崎遺跡，古墳時

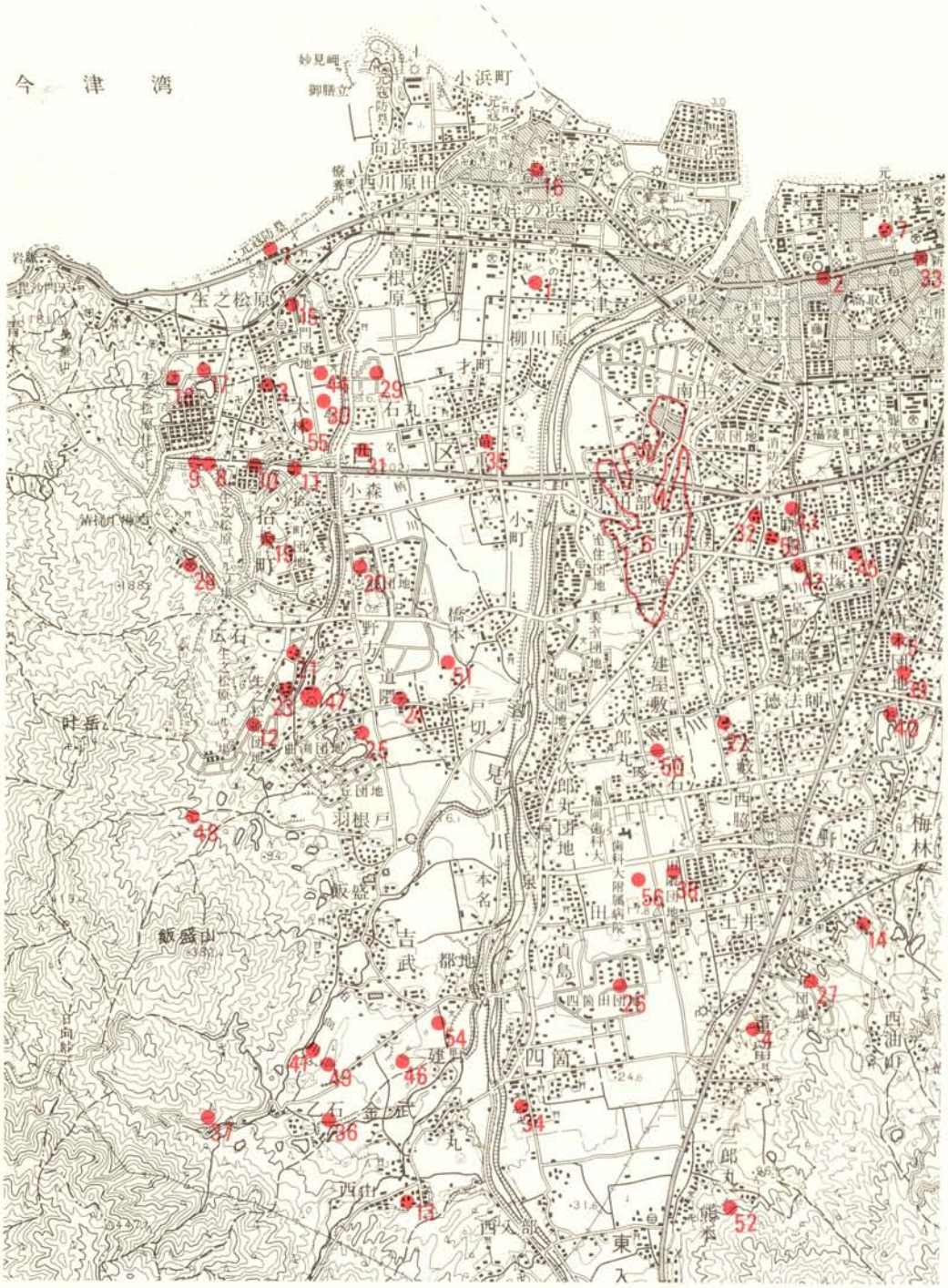


Fig. 1　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

0　2km

Tab. 1　野方勧進原遺跡周辺調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	調査原因	調査主体	遺跡の概要	時代	報告・文献	備考
1	五島山古墳	山林開墾		箱式石棺，銅鏡・他	古墳前期	①④－a⑯	1913年10月
2	藤崎遺跡群		島田寅次郎・中山平次郎・鏡山猛	箱式石棺 甕棺・銅鏡2	弥生前期～古墳	③④－b⑤⑧⑨	1911年・1916年 1930年発見調査
		地下鉄建設（福岡市高速鉄道建設局）	市教委	甕棺墓・石棺墓	弥生前期～中期	㊳	1977～1978年調査
		ビル建設	市教委	甕棺墓・土坑墓	弥生前期～中期		1977年調査
		ターミナル建設	市教委	方形周溝墓・銅鏡3・他	弥生終末～古墳		1980年調査
3	城ノ原廃寺			寺院址	奈良	⑦	1927年～鏡山氏 玉泉氏踏査
4	重留遺跡	祠再建工事	金関丈夫・森貞次郎	箱式石棺墓・銅鏡・他	古墳前期	⑫－a	1952年10月
5	飯倉丸尾遺跡	土砂崩壊	森貞次郎・岡崎敬	甕棺墓・細形銅剣	弥生前期	⑫－b	1963年8月
6	有田遺跡群	土地区画整理	市教委 九大考古学研究室	集落址・他	古墳前期～中世	⑩⑪	1966～1967年調査
		住宅建設等	市教委	集落址・墳墓址	縄文～中世	㉘㊱	1975年以降継続中
7	元寇防塁	保存整備	市教委 九大考古学研究室	生の松原地区元寇防塁	鎌倉	⑬	1967年調査
		保存整備	市教委	西新地区元寇防塁	鎌倉	⑭	1969年調査
8	大又遺跡	今宿バイパス建設（日本道路公団）	県教委	集落址	弥生後期・古墳後期	⑮	1969年～1971年調査
9	高崎古墳群	今宿バイパス建設（日本道路公団）	県教委	円墳6基	古墳後期	⑮㉒	1969年～1971年調査
10	宮の前遺跡	今宿バイパス建設（日本道路公団）	県教委	集落址	弥生終末～古墳	⑮	1969年調査
		宅地造成	市教委	集落址・墳墓	弥生終末～古墳	⑰⑱	1969年～1970年調査
11	湯納遺跡	今宿バイパス建設（日本道路公団）	県教委	集落址・水田址	縄文・弥生・古墳	⑮㉗	1971年～1973年調査
12	小松ヶ丘古墳群	宅地造成	鈴木重治他	円墳16基・他	古墳後期	㊼	1970年～1973年調査
13	金武古墳群	宅地造成	九大考古学研究室	円墳2基・他	古墳後期	⑲	1970年調査
14	影塚1・2号墳		市教委	円墳2基	古墳後期	⑳	1971年調査
15	下山門遺跡	市営住宅建設（下山門団地）（福岡市建築局）	市教委	集落址・製鉄址	古墳～平安	㉑－a	1972年調査
16	姪浜新町遺跡	店舗建設基礎工事	市教委	甕棺墓・他	弥生中期	㉑－b	1972年調査
		下水道管埋設工事	市教委	甕棺墓・他	弥生中期		1980年調査
17	斜ヶ浦瓦窯址	宅地造成	市教委	瓦窯址	平安	②㉓	1972年調査
18	草場古墳群	宅地造成	市教委	円墳4基	古墳後期	㉓	1973年調査
19	コノリ古墳群	宅地造成	日大，竹石建二	円墳8基	古墳後期	㊻	1973年調査
20	牟多田遺跡	壱岐中学校建設（福岡市教育委員会）	市教委	水路址・製鉄址	古墳～奈良	㉔	1973年調査
21	野方中原遺跡	宅地造成	市教委	集落址・墳墓址	弥生後期～古墳	㉕㉛	1973年～1974年調査
22	鶴町遺跡	賀茂小学校建設（福岡市教育委員会）	市教委	水路址	弥生前期～古墳	㉖	1973年調査
23	野方塚原遺跡	宅地造成	野方塚原遺跡調査団	墳墓址	弥生終末～古墳	㊼	1975年調査
24	戸切中原遺跡	宅地造成	日大，竹石建二	集落址	古墳	㊼	1974年調査
25	戸切遺跡	壱岐南小学校建設（福岡市教育委員会）	市教委	集落址・倉庫群	古墳～中世	㊼	1974年～1975年調査
26	四箇遺跡群	団地建設（四箇団地）（日本住宅公団）	市教委	集落址・水田址・墳墓址	縄文～古墳	㊼	1976年～1978年調査
26	四箇遺跡群	住宅・店舗建設	市教委	集落址・水田址・墳墓址	縄文～古墳	㉙㉛	1976年～継続調査
27	山崎古墳群	宅地造成	大川清	円墳10基・他	古墳後期	㊼	1974年調査
28	広石古墳群	西陵高校建設（福岡市教育委員会）	市教委	円墳7基	古墳後期	㉚	1975年～1976年調査
29	下山門敷町遺跡	宅地造成	市教委	銅戈3　官衙址？	弥生～平安	㊼	1975年調査
30	下山門南遺跡	団地建設（日本住宅公団）	市教委	包含層・杭列	古墳前期	㊼	1976年予備調査 1980年本調査
31	石丸古川遺跡	団地建設（日本住宅公団）	市教委	包含層・建物群	古墳～奈良	㊼	1976年予備調査 1981年本調査
32	原談儀遺跡	店舗建設	市教委	水田址・集落址	縄文晩期～中世		1975年調査
33	西新町遺跡			甕棺墓	弥生後期	⑥	
		地下鉄建設（福岡市高速鉄道建設局）	市教委	集落址・墳墓址	弥生後期～古墳		1976年～1978年調査
34	盛園遺跡	消防学校建設	市教委	建物群	古墳		1976年～1977年調査
35	福重遺跡	分譲住宅建設	市教委	水田址	弥生前期		1976年調査
36	夫婦塚古墳	水田造作	市教委	円墳2基	古墳後期	㉝	1978年調査
37	吉武古墳群D群	県道建設	市教委	円墳6基	古墳後期	㉞	1978年調査
38	高柳遺跡	中学校建設	市教委	土坑墓その他	平安～鎌倉	㊸	1978年調査
39	干隈遺跡	分譲住宅建設	市教委	石棺墓・土坑墓・他	弥生・室町		1979年調査
40	干隈クマゾエ古墳群	分譲住宅建設	市教委	円墳2基・他	古墳後期		1979年調査
41	吉武塚原古墳群	圃場整備	市教委	円墳8基	古墳後期	㉟	1979年調査
42	飯倉向江遺跡	マンション建設	市教委	甕棺墓17基・他	弥生中期		1979年調査
43	原小園遺跡	マンション建設		竪穴・他	平安		1979年調査
44	下山門南遺跡	団地建設（公社）	市教委	住居址・他	弥生中期～後期		1979年調査
45	原深町遺跡	小学校建設	市教委	水路遺構・他	古墳前期	㊹	1979年調査
46	乙石A遺跡	県道建設	市教委	建物群・他	平安	㊺	1979年調査
47	野方勧進原遺跡	分譲住宅	市教委	住居址・他	弥生後期	㊵	1979年～1980年調査
48	羽根戸古墳群	砂防ダム建設	県教委	円墳4基	古墳後期		1980年調査
49	吉武熊山古墳群	重要遺跡確認調査	市教委	円墳8基の内 装飾古墳1基	古墳後期	㊶	1980年調査
50	次郎丸高石遺跡	中学校建設		竪穴・溝・他	縄文後期～古墳		1980年調査
51	橋本榎田遺跡	分譲住宅建設	市教委	建物群・他	平安		調査中
52	三郎丸古墳群	分譲住宅建設	市教委	円墳13基	古墳後期		1980年調査
53	原前田遺跡	マンション建設		竪穴・他	平安	㊵	1980年調査
54	都地南遺跡	県道建設		建物群・他	弥生～平安		1980年調査
55	拾六町ツイジ遺跡	小学校建設		水路遺構・他	弥生～鎌倉		調査中
56	田村遺跡群	団地建設（公社）		水路遺構・他	弥生～		調査中

代前期の箱式石棺墓より銅鏡を始めとして豊富な副葬遺物を出土した五島山古墳，そして奈良時代の寺院址として報告された城之原廃寺址などが主要なものである。戦後においても，有田遺跡調査以前までの段階は，有田や重留の箱式石棺墓などのように偶然の発見による考古学者の立会調査がほとんどであり，行政的措置に基づく調査例は無い。また，遺跡の内容も，青銅器や鑑鏡を副葬する甕棺墓，箱式石棺墓に限定されており，集落址や墳墓群などの調査例は無く，考古学の学問的発展段階と文化財保護行政のそれに限定されていると言って良い。

有田遺跡調査の成果

有田遺跡の調査は，1967年と1968年の2月，有田地区土地区画整理事業に伴う緊急調査として福岡市教育委員会の委託を受けた九州大学考古学研究室によって実施された。この2年次にわたる調査の成果は，それまで唯一板付遺跡で明らかにされていた弥生時代前期初頭の農耕集落が有田にも存在すること，そしてこの地が弥生時代以降中世に至る各時期の遺構を含む集落遺跡群であることなどを明らかにした点であるが，さらに発掘調査報告書には，早良平野周辺のそれまでの調査史が集大成され，その後の早良平野周辺の調査・研究の指針を示した点であろう。しかしながら，発掘調査されたのは広大な遺跡群の内のごく一部分であり，周辺の宅地化に対しては，この調査以後8年の空白を経て1976年から福岡市教育委員会による継続調査が実施されるようになり，現在に至り，各時代の内容が次第に明らかにされつつある。

有田遺跡調査以後

1969年4月，福岡県教育委員会と時を同じくして，福岡市にも文化課が設置され，ようやく開発に対する文化財保護の体制が執られるようになり，その後，早良平野周辺の埋蔵文化財緊急調査件数は増大する。1969年から70年代初期の段階では，今宿バイパス建設に伴う拾六町周辺の調査が行われ，宮ノ前，大又，湯納遺跡などの弥生時代終末期から古墳時代前期の墳墓群や集落址，高崎古墳群などの後期古墳群が県教委によって調査されている。同時に，バイパス近接地の宅地造成の進展に伴い，丘陵地に群在する後期古墳群，弥生時代終末期から古墳時代の水田址などの調査が相ついで行われている。1970年代前半は，バイパス建設による周囲の宅地化が進行し，発掘調査地域も，下山門，拾六町，野方付近の丘陵地から水田地帯に拡大する。それにつれて，後期古墳群と共に，沖積地の遺跡も数多く調査され，検出される遺構も各時代のものを含み，集落と共に各種の生産遺構や遺物が検出されてきた。1970年代後半においては，日本住宅公団四箇田団地を初めとして，早良平野中央部まで市街地は拡大し，発掘調査も丘陵部から平野部全域に展開する。この結果，それまであまり知られていなかった縄文時代後晩期の遺構，遺物も次第に明らかになりつつある。又，1977年以降の地下鉄建設に伴う西新から藤崎の海岸砂洲の発掘調査では，弥生前期から古墳前期の墳墓群や集落が明らかにされ，今や早良平野周辺で発掘調査されていない地域は無いと言っても過言ではない。

以上，周辺の調査史を概観したが，詳しくは次表および報告文献を参照されたい。

野方勧進原遺跡周辺調査遺跡関係報告文献

① 高川幻六「五島山の石棺」筑紫史談第4集　1915年

② 中山平次郎「警の一字を有せる古瓦片」考古学雑誌5巻12号　1915年

③ 中山平次郎「古式支那鏡鑑沿革(二)」考古学雑誌第9巻3号　1918年

④a 島田寅次郎「五島山の石棺」福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第1輯　1925年

④b 島田寅次郎「藤崎の石棺」福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第1輯　1925年

⑤ 永倉松男・鏡山猛「筑前藤崎における弥生式遺跡」考古学第2巻1号　1931年

⑥ 鏡山猛・永倉松男「筑前福岡市発見の甕棺」「考古学」第2巻　1931年

⑦ 玉泉大梁「壱岐村城ノ原廃寺址」福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第6輯　1931年

⑧ 森本六爾「筑前藤崎の弥生式土器」考古学第5巻1号　1934年

⑨ 鏡山猛「甕棺累考(二)」史渕第55輯　1953年

⑩ 九州大学考古学研究室編「有田古代遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集　1967年

⑪ 九州大学考古学研究室編「有田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集　1968年

⑫a 森貞次郎・佐野一「重留箱式石棺」有田遺跡所収　1968年

⑫b 森貞次郎「飯倉の甕棺と細形銅剣」有田遺跡所収　1968年

⑬ 福岡市教育委員会「生の松原元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集　1968年

⑭ 福岡市教育委員会「西新元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集　1970年

⑮ 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集」　1970年

⑯ 亀井明徳「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」九州考古学38　1970年

⑰ 下條信行・沢皇臣編「宮の前遺跡A～D地点」福岡県労働者住宅生活協同組合　1971年

⑱ 福岡市教育委員会「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集　1971年

⑲ 福岡市教育委員会「金武古墳群発掘調査報告―1・2号墳，近世墳墓の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集　1971年

⑳ 福岡市教育委員会「福岡市影塚第1号墳発掘調査報告―附　影塚第2号墳石室実測図・周辺古墳分布図」福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集　1972年

㉑a 福岡市教育委員会「下山門遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年

㉑b 福岡市教育委員会「姪浜新町遺跡調査報告」「下山門遺跡」所収　1973年

㉒ 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集」　1973年

㉓ 福岡市教育委員会編「草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址」早良鉱業株式会社　1974年

㉔ 福岡市教育委員会「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974年

㉕ 福岡市教育委員会「福岡市野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集　1974年

㉖ 福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書37集　1976年

㉗ 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集　1976年

㉘ 福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集　1977年

㉙ 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集　1977年

㉚ 福岡市教育委員会「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集　1977年

㉛ 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集　1978年

㉜ 柳田純孝　「野方中原遺跡の遺物(1)―Ａ溝出土の土器―」福岡市立歴史資料館研究報告第２集　1978年

㉝ 福岡市教育委員会「夫婦塚古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集　1980年

㉞ 福岡市教育委員会「県道大野二丈線関係埋蔵文化財調査報告(I)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集　1980年

㉟ 福岡市教育委員会「吉武塚原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集　1980年

㊱ 福岡市教育委員会「有田・小田部第１集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980年

㊲ 福岡県教育委員会「羽根戸古墳群」福岡県埋蔵文化財調査報告書第57集　1980年

㊳ 福岡市教育委員会「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告（Ｉ）藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集　1981年

㊴ 福岡市教育委員会「四箇周辺遺跡調査報告書（４）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集　1981年

㊵ 福岡市教育委員会「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告Ｉ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集　1981年

㊶ 福岡市教育委員会「吉武熊山古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集　1981年

㊷ 福岡市教育委員会「福岡市学校建設地内遺跡調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集　1981年

㊸ 福岡市教育委員会「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集　1981年

㊹ 福岡市教育委員会「原深町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集　1981年

㊺ 福岡市教育委員会「県道大野二丈線関係埋蔵文化財調査報告（II）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第74集　1981年

地名表その他

㊻ 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第１集―福岡市西部地域（早良平野以西）の遺跡分布調査の概要―」　1969年

㊼ 福岡市立歴史資料館「緊急発掘された遺跡と遺物」　1977年

㊽ 福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図（西部Ｉ）」　1979年

III．調査の記録

1．遺跡の概要

当遺跡は叶嶽（標高 382m）から北西に向って早良平野へ張り出す舌状台地上に立地しており，標高約30mを測る台地鞍部の中央から西縁部にかかる地点に位置する。遺跡周辺には国指定史跡である野方中原遺跡（弥生時代終末～古墳時代の集落址，墓址）をはじめとして野方塚原遺跡（弥生時代終末～古墳時代の墓址）などの分布をみる。また当遺跡の立地する台地基部には羽根戸古墳群，野方古墳群等の総数 152基（うち野方古墳群の一部など20基は消滅）の後期群集墳が営まれており，この地域は遺跡の分布密度がかなり高い傾向を示している。律令時代における野方（額田）駅の比定地問題をも含んで，弥生時代後期～古墳時代における地域相を知る上で，当遺跡は重要な意義をもつ地域に位置すると考えられる。

発掘調査は開発面積の約90％にあたる2600㎡の範囲を調査区として設定し実施した。当該地は戦後まもない時期に雑木林として放置されていたものを農地として開墾し現在に至っているため，人為的攪乱は比較的受けていないものと予想したが，調査の過程で樹根および開墾時の削平によって遺物包含層はそのほとんどが消滅しており，遺構についても後述するようにかなり影響を受けていることが判った。

調査地の基本層序は上位から，Ⅰ層：耕作土層（層厚20～25cm），Ⅱ層：暗灰褐色粘質土層（層厚20～25cm），Ⅲ層：黄褐色粘質土層（層厚20～30cm），Ⅳ層：赤褐色粘質土層（層厚70～100cm）となる。Ⅳ層は当遺跡の立地する舌状台地の地山を形成するもので，基盤層である早良花崗岩の風化土壌（花崗岩バイラン土）である。Ⅲ層とⅣ層との境は漸移的である。Ⅱ層はⅢ層の二次堆積土と考えられ，木炭片，若干の遺物を包含する。遺構はⅢ層上面から掘りこまれているが，本来の掘方の上半分は，先述したように削平を受けて消滅していると考えられる。なお調査区においてⅣ層上面（地山面）は台地基部側から先端部（南々東から北北西）へ2/100の傾斜度で緩やかに続いており標高30.3～30.7mを測る。西南部は台地落ち際にあたり急峻な斜面となって，比高差約10mを測る西側谷地形へと続いている。

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居址5軒，掘立柱建物3棟，溝状遺構（弧状溝1，コの字形溝1）2条，竪穴遺構2基，柱穴掘方 734個，性格不明土坑 201個である。これらの遺構は少なくとも3時期にわたって営まれたことが，切り合関係，掘り方内埋土の差異，出土遺物の時期差によって考えられる。遺構の分布は調査区の中央から東南側にかけて次第に密度が高くなっており，遺跡の広がりは，今回の調査地点からさらに台地基部側へ展開するものと予想され，住居址の分布からみて集落址の北西部の一隅にあたると考えられよう。遺物の出土量は少なかったが，2号竪穴遺構の鉄滓，1号・4号住居址の立岩産石包丁は注意されよう。

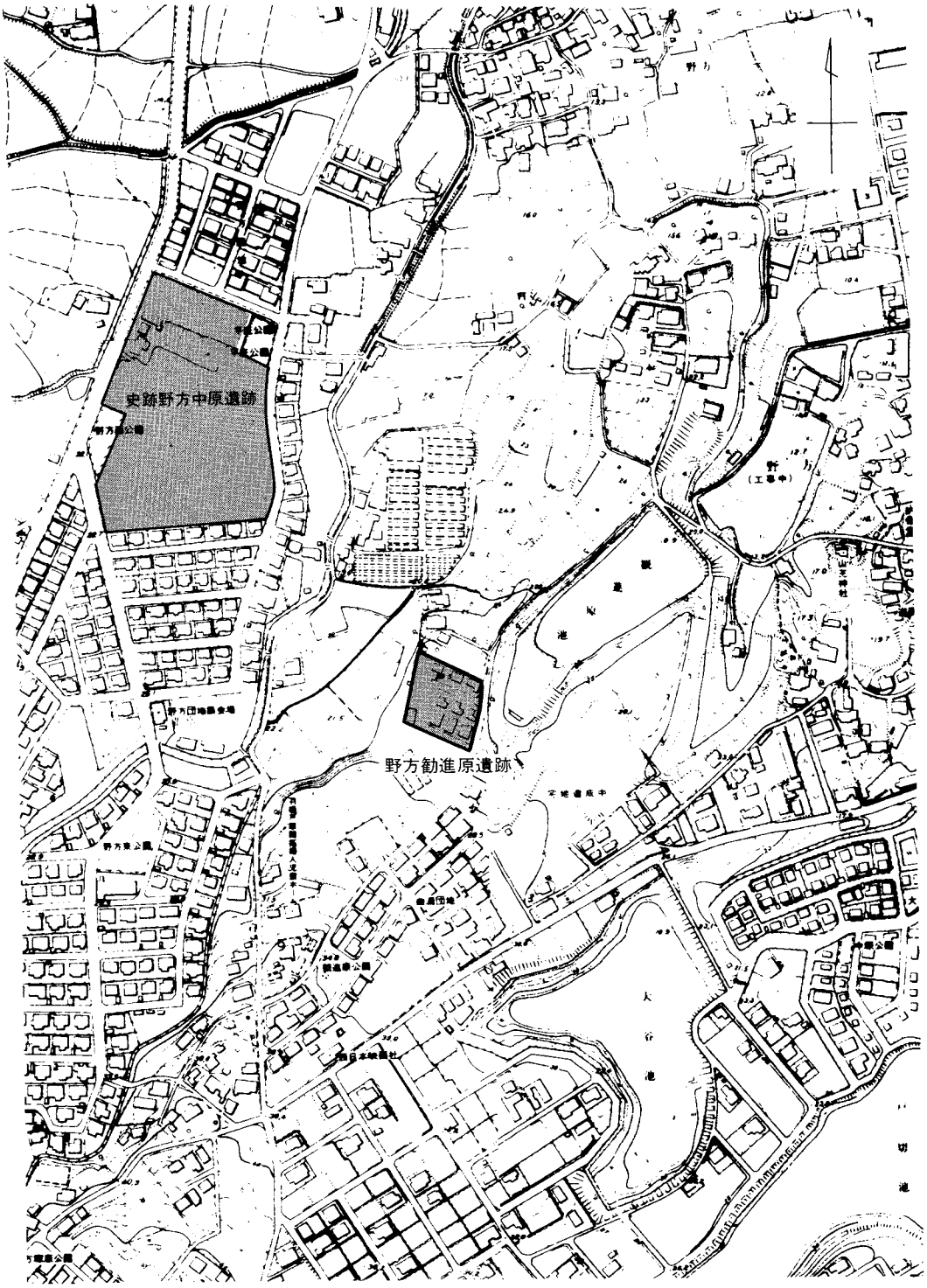


Fig. 2　野方勧進原遺跡地形図

1：5,000

0　100　200 m

2．竪穴住居址

住居址は調査区の中央から南側にかけて計5軒が検出された。後世の開地造成により調査区は全面にわたって削平を受けており，特に東側に位置する道路際から調査区南側にかけては遺構の遺存状況はあまりよくない。5軒の住居址は比較的散在した位置関係を示している。分布の在り方，地形復元から考えて，住居址はさらに台地の基部（調査区南側方向）にかけて遺存していた可能性がある。したがって今回の調査においては集落址の一隅を調査したと考える。

1号住居址（Fig. 3，PL. 2・3）

調査区の中央からやや東北寄りの位置で検出された。4号住居址とは炉址間で約19.5mを測る。全体的に削平されているものの遺存状況は比較的良好である。地形が緩やかに南から北へ傾斜しているため南壁が床面から25～30cmほどの高さで遺存しているのに対して，北壁はわずか10cm前後残すのみである。竪穴平面形は北壁がやや歪んだ長方形であり，壁長は東壁6.52m，西壁6.03m，南壁3.97m，北壁4.01mを測る。長軸はN－21°10″－Wで地形の傾斜とほぼ同一の方向をとる。竪穴内にはコーナーに密接するP－1・4・6と，長軸上に並ぶP－2・5の計5個のピットが確認された。P－1とP－6は床面からの深さ29cm・42cmで，径は34cm・32cmを測り形態的にも共通するが，P－4は深さ16cm，径26cmで若干小さい。図示した（P－3）はP－1・4・6の位置関係から推定復元したものである。柱間距離はP－1・6間5.91m，P－1・（P－3）間3.36m，（P－3）・P－4間5.39m，P－4・1間3.61mである。P－2・5については，位置関係から棟支えの補助的支柱穴と思われる。炉址は竪穴の中央からやや東壁寄りである。いわゆる地床炉で，径70～80cmの不整円形をなし深さ15cmほどの浅い擂鉢状である。炉壁は火を受け堅くしまり赤変している。埋土中には多量の木炭片，獣骨，魚骨小片がみられた。植物遺体については不明。炉址の東隣に貯蔵穴と思われる土坑が位置している。これは，後述する2号～4号住居址（5号については不明）にも共通してみられるもので，形態，配置関係を同じくする点は住居址構造を知る上で留意される。東・西・北壁に沿って断面U字形の側溝が断続してみられる。北壁には，幅1.5m，床面から12.5cmの高さを測るベッド状遺構が付設されている。P－5付近で自然消滅しており，全体の形状については不明である。

出土遺物　（Fig. 4・5，PL. 11）

出土状況　住居址内の埋土から出土した遺物は，弥生土器，打製および半磨製石鏃，ガラス製小玉が出土している。土器片はいずれも小片で全体の器形を窺えるものは無い。住居址床面から出土し時期比定の目安となる遺物はP1～5・P7・P8と，G1～14である。床面上における遺物の分布は，土器が東・西壁際に，ガラス製小玉が炉址の南側周辺にまとまる傾向がみられる。ガラス製小玉G7～14は床面直上の埋土の水洗選別によって検出された。

P1～3・P6は甕形土器の破片である。P1～3はくの字に外反する口縁部を有すもので，

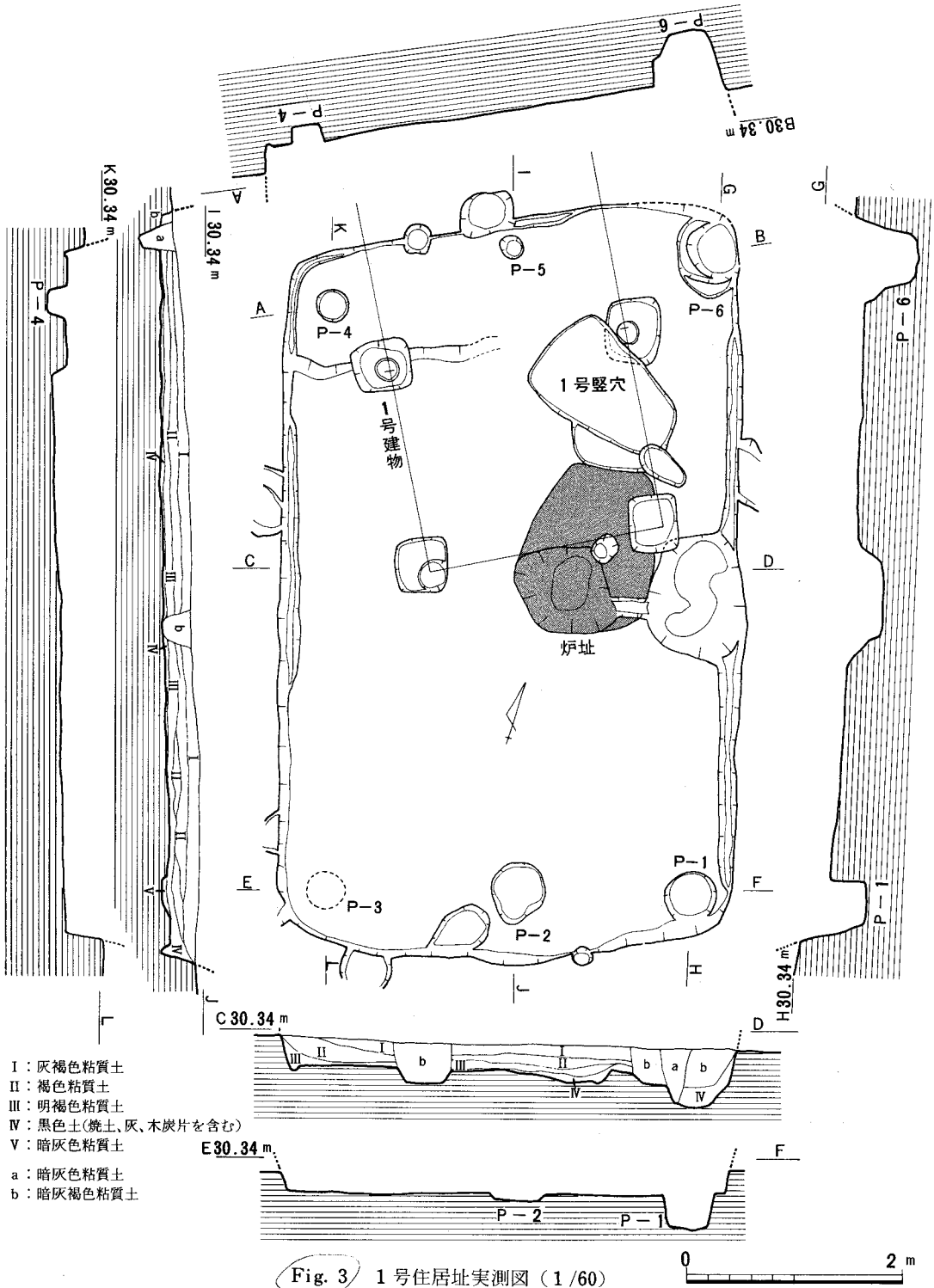


Fig. 3　1号住居址実測図（1/60）

内外面ともやや目の粗いハケ目調整が施されている。Ｐ１・Ｐ３の復元口径は18.8cm・19.8cm，Ｐ３の器高は14.3cmを測る。Ｐ４は高杯の口縁部である。炉址内埋土から出土。器面の剝落が著しく不明瞭であるが外面はハケ目調整が施される。Ｐ５・Ｐ８は鉢形土器である。Ｐ８は口径13.6cm，器高 7.6cmを測る。安定した平底から体部は内弯気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさまる。Ｐ５はやや不安定な平底で丸みをもつ。器形はＰ８と比べて若干器高が低くなると思われる。Ｐ７は中型の壺形土器体部片である。最大形を測る体部中位のやや上に断面台形

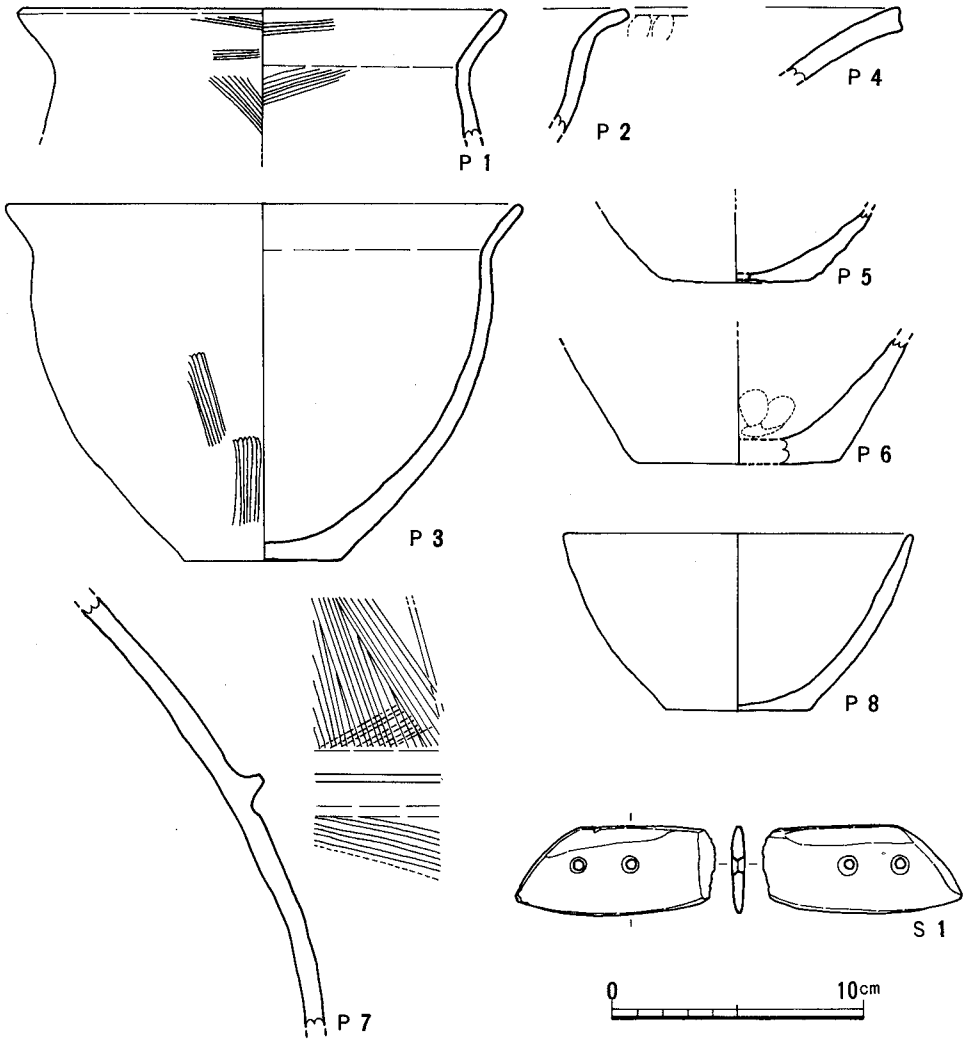


Fig. 4　１号住居址出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

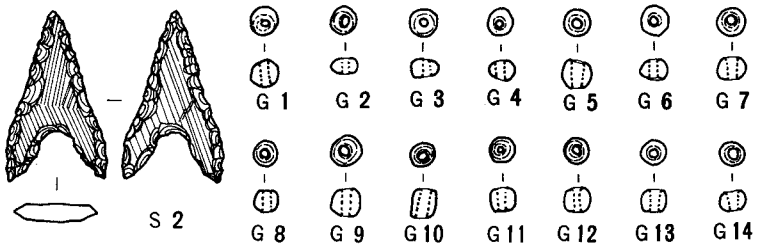


Fig. 5　1号住居址出土遺物実測図II（1/1）　0　2 cm

の突帯がやや上向きに貼付される。外面は目の粗いハケ目が斜位に施される。S 1は小豆色を呈す輝緑凝灰岩製石包丁である。現存長 7.9cm，幅 3.7cm，厚さ 0.6cm。穿孔は表裏両面から施される。刃部，背縁の磨研は特に丁寧である。S 2は黒曜石製半磨製石鏃である。表裏両面に磨研が施される。長さ 2.3cm，幅 1.4cm，厚さ0.25cm。G 1～14はガラス製小玉である。形状はほぼ球形のものがほとんどであるが，扁平な球形のもの（G 2・3），管状球形のもの（G 10）がある。色調はいずれも透明なスカイブルーである。

2号住居址　（Fig. 6，PL. 3・4）

調査区の南壁にかかって検出されたため完掘はしていない。3号住居址を切って竪穴掘削が行なわれている。遺存している壁の床面からの高さは9～20cmで西壁の遺存が良好である。埋土は黒灰色の木炭片を多く含む土壌で（この土壌を埋土とする遺構は他に3号住居址，コの字形溝がある）検出当初火災にあったのではないかと思われたがその様子は窺われなかった。竪穴平面形は南半分が未掘のため不明確であるが1号・2号と比較して長軸がやや短い長方形になると思われる。ただし主柱穴と考えられるP－1～4の配列状況からみると北壁（壁長 4.1 m）を一辺とする方形の竪穴平面形になることも考えられる。南北長軸はN－16°10′－Eで3号住居址長軸とほぼ平行する。P－1～4の柱間距離はP－1・2間3.34m，P－2・3間2.32 m，P－3・4間3.42m，P－4・1間2.50mを測る。各ピットは径24～32cm，床面からの深さ12～15cmでほぼ同程度の規模であるが1号・4号住居址の主柱穴と比較してやや小さく掘方も浅い。炉址は長径0.82m，短径0.75m，床面から12.2cmを測る不整円形の地床炉で浅い擂鉢状をなす。炉址内には焼土，木炭片が多量に包含され，炉壁は赤橙色に焼け堅くしまっている。炉址に近接して，1号住居址同様東壁際に貯蔵穴と思われる土坑が付設されている。長径0.82 m，短径0.74m，深さ0.26mの不整楕円形である。土坑内基底面直上からP 9と，台石に用いられたと思われる花崗岩角礫が出土している。西壁に沿う側溝は北壁のP－4の位置で方向を変え炉址北側を抜け土坑に連接して付設されている。この側溝と北壁とで区画された部分にベッド状遺構があったと考える。また南壁際にもベッド状遺構がみられる。西側がその形状を失なっているが，床面から10～12cmの高さである。

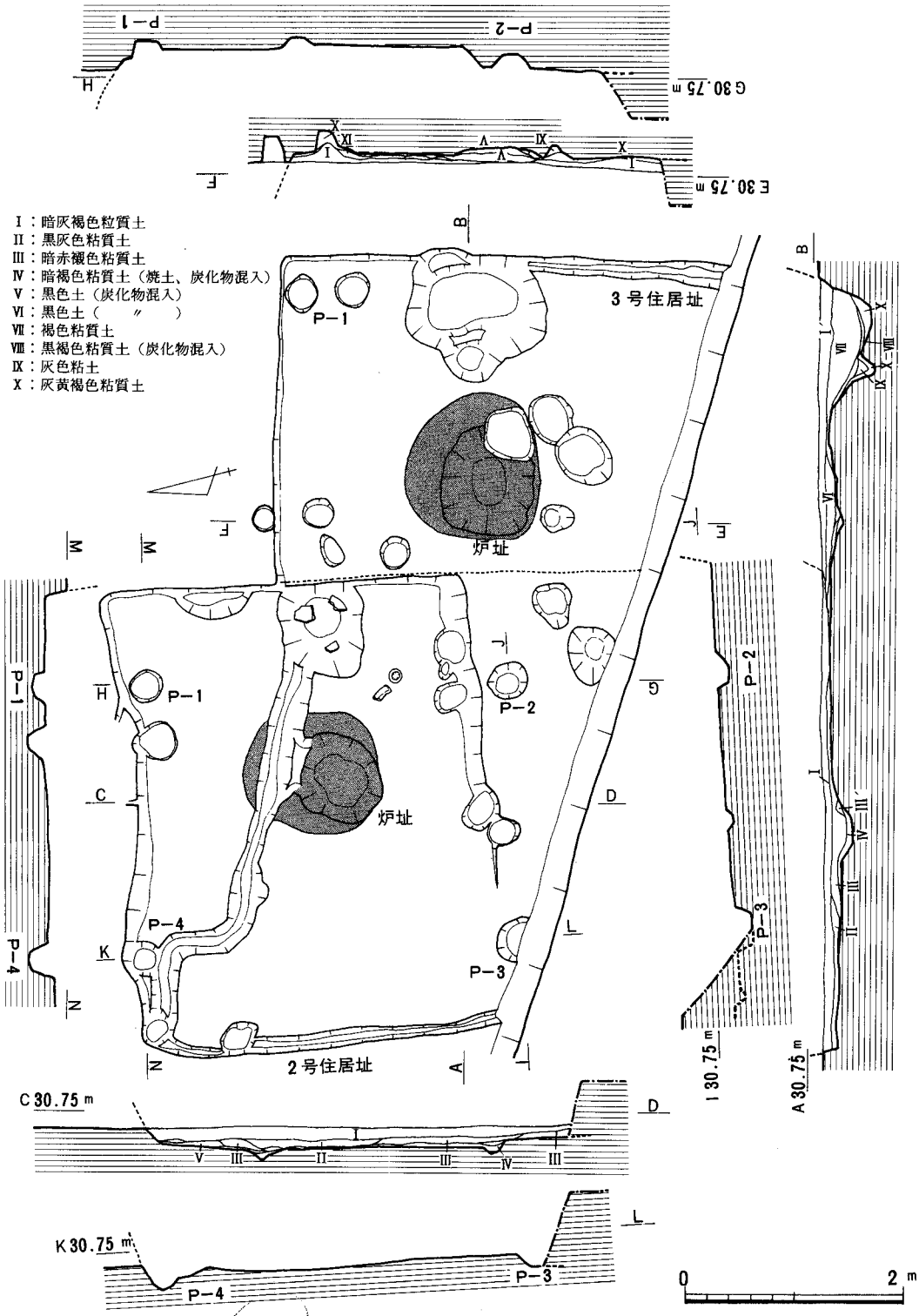


Fig. 6　2号・3号住居址実測図（1/60）

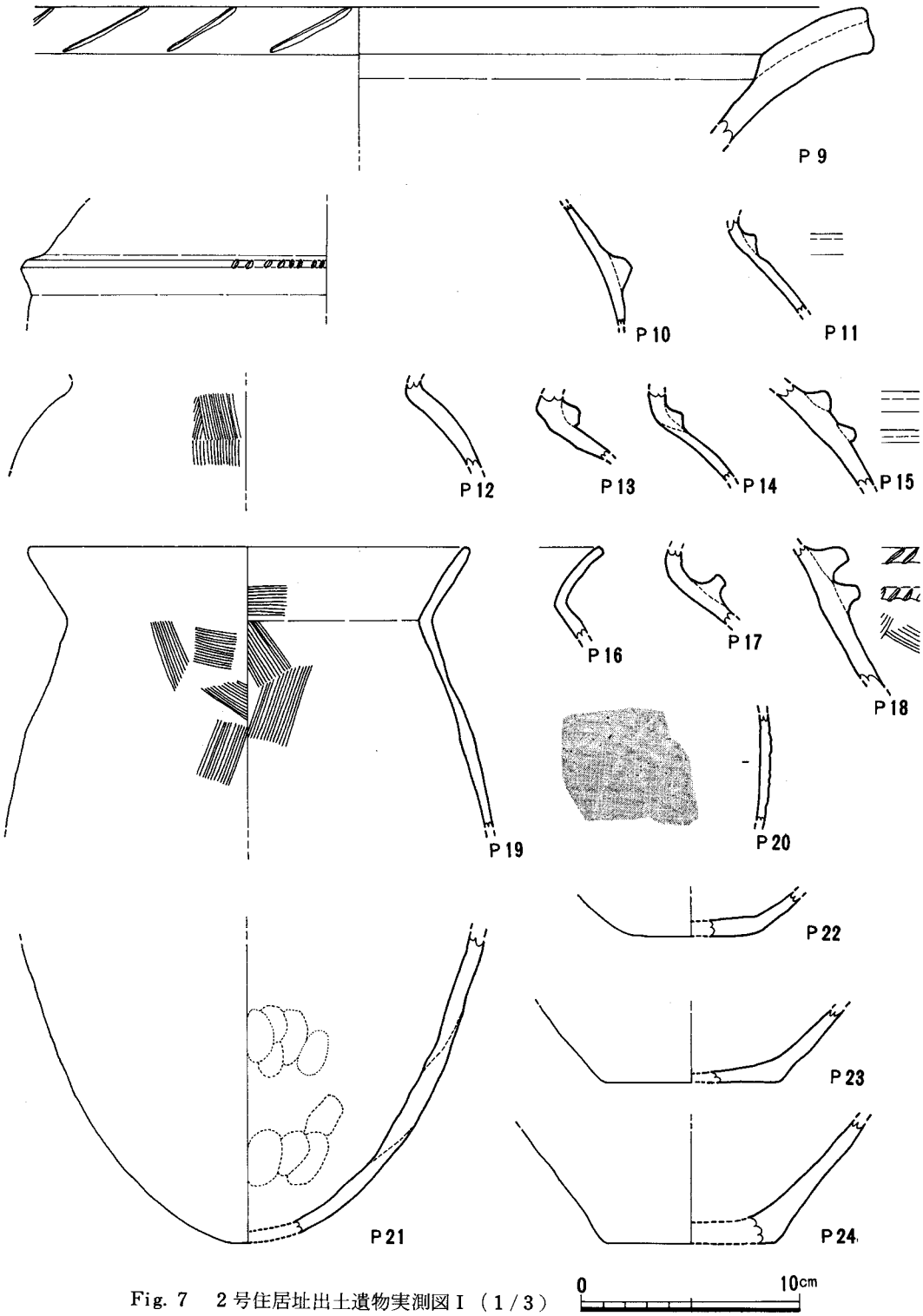


Fig. 7　2号住居址出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

出土遺物　(Fig. 7～9, PL. 11・12)

出土状況　床面直上から出土した遺物はP 9（土坑内), P10, P26, S 3である。他はすべて埋土上部からの出土で，流れこみによるものと思われる。P20はIII区中央から破片がまとまって検出された。

P 9～P15・P17・P18は壺形土器の破片である。P 9は復元口径46.2cmの大型の壺形土器口縁部で，強く外反する口縁内面に幅5.5cm，厚さ0.75cmの粘土帯を貼付し口縁部を肥厚させている。口縁端部には斜位の刻目がみられる。P 9以外は肩から頸部にかけての破片で，一条ないし二条の突帯を貼付している。P10とP18は押圧による刻目が突帯上端部に施されるものである。いずれも胎土は粗く砂粒を多く含み焼成はあまい。色調は灰褐色～黄褐色を呈す。P16・P19～P21は甕形土器の破片である。P19は長胴の体部を有し口縁がくの字に外反するもので，口縁部内面，体部内外面にはハケ目調整を施す。P16はP18と比べ体部がやや短めとなり，肩が若干張る器形になるものと思われる。くの字に外反する口縁部は内外面とも横ナデにより仕上げられている。P21はP16と同様長胴となり，底部が丸みのある平底となるものである。器

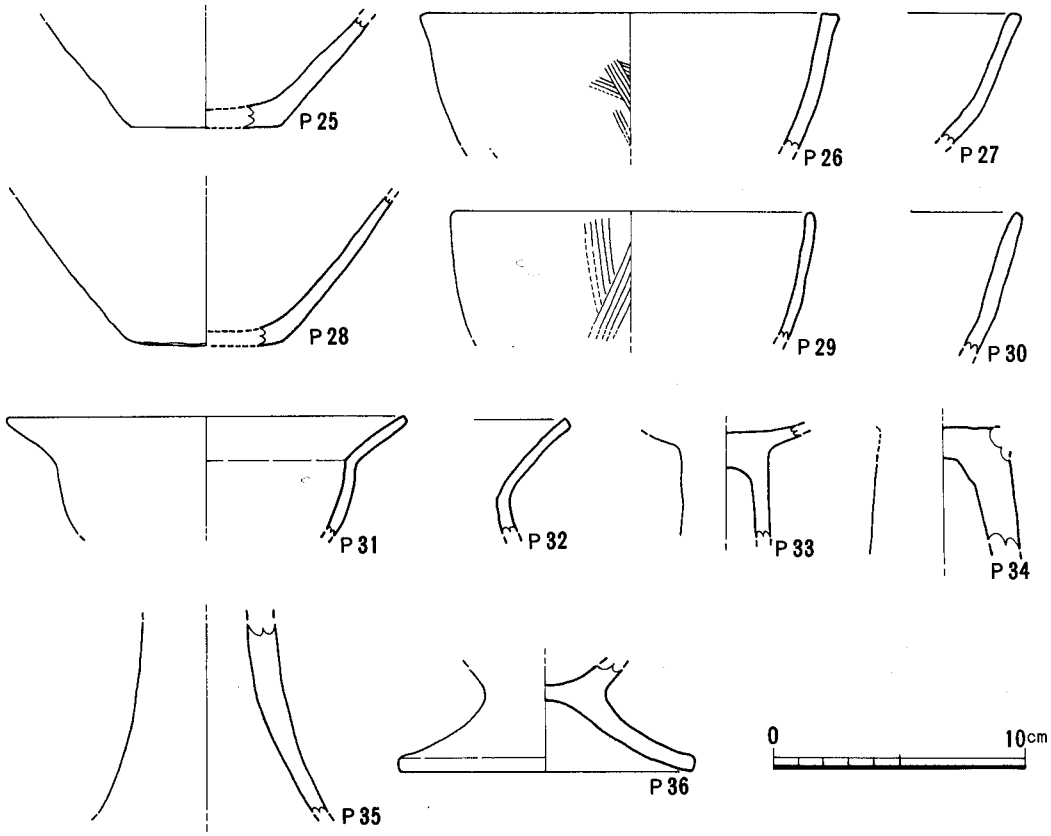


Fig. 8　2号住居址出土遺物実測図II（1/3）

面が剝落し不明瞭であるが，目の粗いハケ目調整が縦位に施されている。内面には指圧痕が残る。なおP19の復元口径は約20cmである。P22～P25・P28は，壺ないし甕形土器の底部破片である。底部と体部との境が明確なもの（P23～P24）と不明確で，底部がやや丸みをもつもの（P22・25）とがある。P26・P27・P29・P30は鉢形土器口縁部破片である。P26・P29は復元口径が15.3cm・14cmを測る。P26は口縁端部がやや凹んで成形されているがP27・P29・P30はいずれも丸くおさめている。器面調整はいずれも内面が丁寧なナデ仕上げで，外面は目の細かいハケ目調整が施されている。先述した甕形土器と比べ，胎土・焼成ともに良好である。P31・P32はくの字に外反する口縁を有する鉢形土器ないし坩形土器である。P31は全面ナデ仕上げで，胎土焼成ともに良好である。P32は口縁部は丁寧なヨコナデ，体部外面は縦位の目の細かなハケ目調整が施される。P32は球形に近い体部をもつと思われる。P33・P34は高杯脚部破片である。P33は土師器で脚部外面はヘラ磨き，内面はヘラ削りによって成形を行っている。P34はやや長めの脚になるものと思われ，内外面ともナデ調整が施されている。P33と比べ胎土，焼成ともに悪い。P35は器台である。外面は目の粗いハケ目調整が縦位に施されている。内面はナデ仕上げ。P36は体部が半球形となる脚付の鉢形土器と思われる。器面が剝落しており不明確であるが丁寧なナデ調整により仕上げられている。脚部内面には指圧痕が残る。色調は赤味の強い化粧土（丹塗りか？）が塗布され赤褐色を呈す。S3は滑石製の有溝石錘である。長さ 5.7cm，身の中央部径 1.6cmを測る。溝が長軸と短軸を各一周し十文字に交差するもので，溝断面はV字形をなす。I1は片丸造りの柳葉形の身をもつ鉄鏃片である。身の復元長 4.4cm，幅 1.1cm，厚さ 0.3cmを測る。古墳時代のものか。

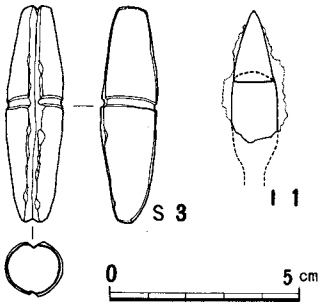


Fig. 9　2号住居址
出土遺物実測図（1/2）

3号住居址　（Fig. 6，PL. 3・4）

2号住居址と同様に，調査区南壁にかかって検出されたため完掘はしていない。先述したように2号住居址によって西壁側を切られている。遺存状況は比較的よいものの，竪穴壁は床面から9～12cmの高さしか遺存しておらず，かなり削平を受けていることが判る。竪穴平面形は推定せざるをえないが，2号住居址とほぼ同規模の長方形をなすものと思われる。住居址内には主柱穴と確定できるピットはP－1の1個のみである。おそらく竪穴の四隅に主柱を配する家屋構造をもつものと思われる。炉址は長径 1.0m，短径0.82m，深さ6cmの浅い擂鉢状の地床炉である。1号・2号住居址と異なり炉壁は堅くしまらず，赤みも弱い。火をあまり受けていない状況である。3号住居址においても炉址と近接して東壁際に土坑がみられる。先の二例と比べ若干大きく長径1.25m，短径 1.0m，深さ0.33～0.35mを測る。基底面から完形の鉢形土器P39が出土している。東壁に沿って側溝がみられる。北壁では検出されていない。

出土遺物（Fig. 10, PL. 12）

出土状況　3号住居址においては，遺物の出土量は少ない。土坑から出土したP39以外はいずれも竪穴内埋土上部からの出土で流れこみによるものと思われる。

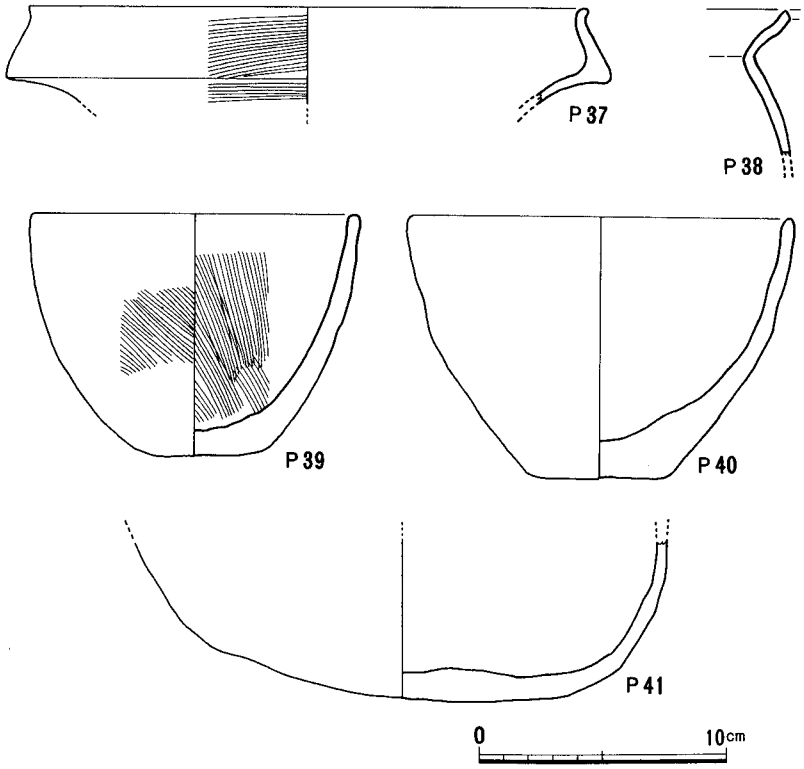
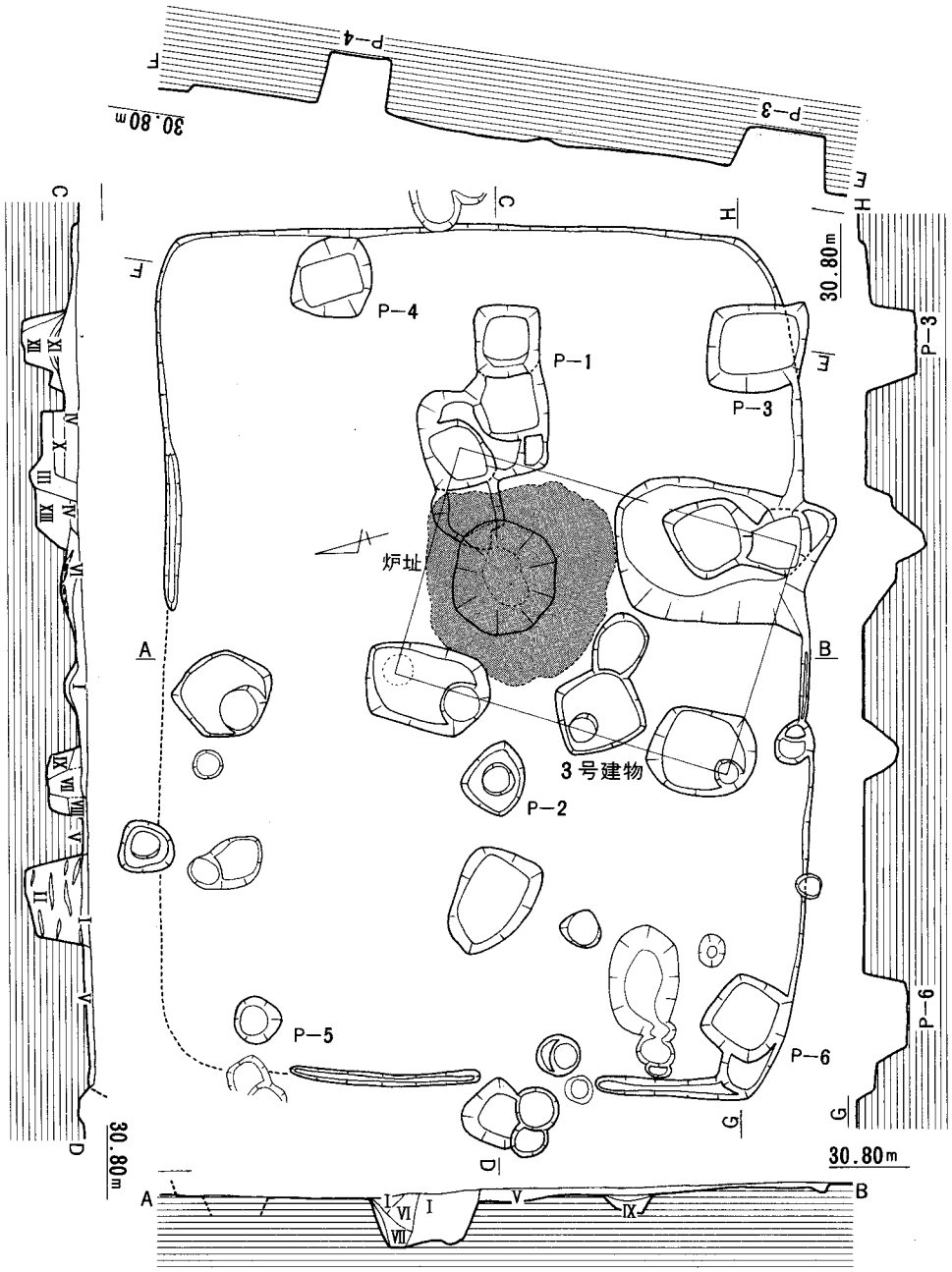


Fig. 10　3号住居址出土遺物実測図（1/3）

P37は二重口縁をもつ壺形土器である。強く外反する頸部端から口縁が内傾気味に立上り，口縁端部はやや外反してつまみ出され丸くおさめられている。外面は目の細かいハケ目調整，内面はナデ仕上げ。復元口径は約22cm。P38は口縁部がくの字に外反するやや長胴の甕形土器である。体部内面はナデ調整で，口縁部内外面はハケ目調整が施される。P39・40は鉢形土器で口径12.3cm・14.7cm，器高 9.8cm・10.5cmを測る。ただしP40については復元値である。いずれも厚手の平底から体部がやや内弯気味に立上り，口縁端部は丸くおさめられるものである。P39は内外面ともやや目の粗いハケ目調整が施されるが，P40の器面調整はナデ仕上げによる。P41は浅鉢状の器形をなすと思われるが不明である。底部破片で，器形の歪みが著しく，作りは非常に悪い。器壁は火を受けたと思われ剝落し，赤灰色に変色している。

4号住居址　（Fig. 7，PL. 5）

1号住居址の南方に占地し，炉址間の距離は19.40mを測る。黄褐色粘質土の地山を掘り込んで構築されており，削平のために遺存状況は良くない。竪穴の掘り方は平面隅丸長方形を呈し，長軸方位はN74°Wを示す。長辺は7.0m，短辺5.0mを測り，床面積は約35㎡である。周壁の遺存状況は悪く，壁高は0～4cmであり，部分的に幅7.0cm内外，床面からの深さ3.0cmの周溝が残る。床中央部のやや東壁寄りに，92×84cmの平面楕円形をなす浅皿状の炉が掘り込まれており，周囲に焼土が散らばり，凹部に炭化物が堆積していた。炉の南側には，長さ150cm，



Ⅰ：灰色粘質土　Ⅱ：黄褐色粘質土　Ⅲ：灰褐色粘質土　Ⅳ：黄灰色粘質度　Ⅴ：暗灰褐色粘質土　Ⅵ：炭化物混入土層　Ⅶ：灰褐色粘質土　Ⅷ：暗灰色粘質土　Ⅸ：褐色粘質土　Ⅹ：黄褐色粘質土　Ⅺ：明褐色粘質土　Ⅻ：褐色粘質土　XIII：黄灰褐色粘質土

0　2m

Fig. 11　4号住居址実測図（1/60）

幅 120cm，深さ26cmを測り，平面隅丸長方形をなすピットが南辺を壁に接して掘り込まれている。貯蔵用の穴と考えられる。

本住居址床部分からは，合計24個の柱穴状小竪穴を検出したが，それらの掘り込み層位や切り合い関係から，住居構築以前，住居廃絶後などのものがあり，少くとも3期に分けられる。しかしながら確実に建物を構成しうるのは3号建物の柱穴のみであり，他の建物は明らかにできない。本住居址の主柱穴と認められるものは，炉を挟んで長軸に並ぶP－1とP－2であるが，四隅のP－3～P－6を合わせて考えておきたい。本住居址にはベッド状遺構は検出されず，床面は固くしまっていたが，いわゆる貼床の構造をなすものではない。

出土遺物（Fig. 12～13，PL. 12）

出土状況　削平のため遺構の遺存状況が悪く，原位置を保つものは無く出土量も少ない。埋土中から弥生土器片，石鏃，ガラス製小玉，炉址から石包丁が出土した。

土器（Fig. 12－P42～P50）　いずれも破片であり全体の器形を窺えるものは無い。

P42は二重口縁の壺形土器の口頸部片であり，復元口径は26.0cmを測る。外弯して開く頸部か

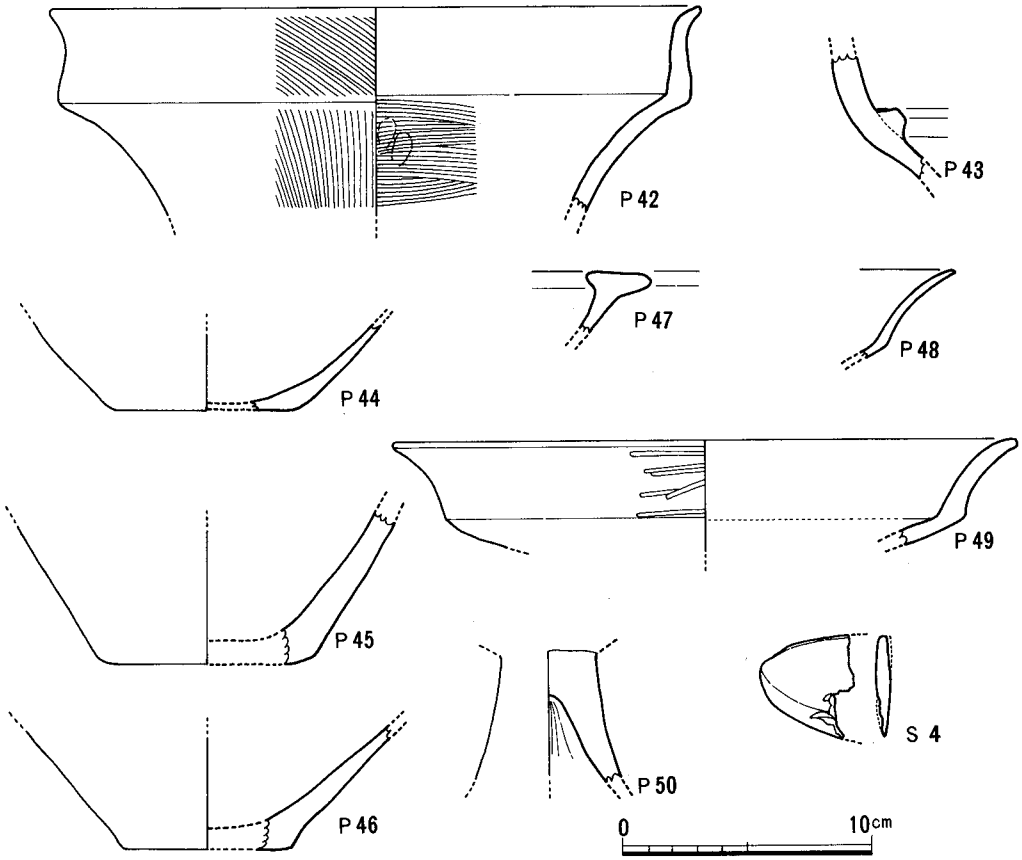


Fig. 12　4号住居址出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

ら屈曲して直立し，口縁端部をつまみ出している。外面は縦方向の粗いハケ目，内面は横方向のハケ目調整を施す。胎土に細かい砂粒を含み，焼成は普通，黄褐色を呈す。P43は壺形土器の肩部破片で，断面台形の突帯を張り付ける。磨耗が著しい。P44は壺形土器の底部片で，胎土は粗く器面は磨耗し，調整痕は不明である。P45は甕形土器の底部片で，平底をなす。磨耗のため鮮明さを欠くが，ハケ目調整を施す。P46は鉢形土器の底部であろう。平底の底部から大きく外開して体部がのびる。胎土は粗く焼成はもろい。P47～P49は高杯の口縁部片である。P47はいわゆる鋤形口縁となるもので，胎土は精良，焼成も良好である。器面は剝落が著しいが，丹塗磨研の痕跡が残っている。P48は体部がいったん稜をなし，外弯して開く口縁部に接合するもので，器肉が薄い。器面は剝落が著しく，調整痕は不明である。P49も同様の形態的特徴を有するが，器肉が厚く口縁部の外弯度が小さい。器面の剝落が著しく調整痕は不鮮明であり，外面に横方向のヘラみがき痕がわずかに残る。胎土に粗い砂粒を含み，焼成は普通，器面は黄褐色を呈する。復元口径は24.4cmである。P50は脚部の破片であり，ラッパ状に開く裾部を欠失する。上端部にはナデの痕が認められ，外面はハケ目調整である。胎土は精良，黄褐色を呈す。

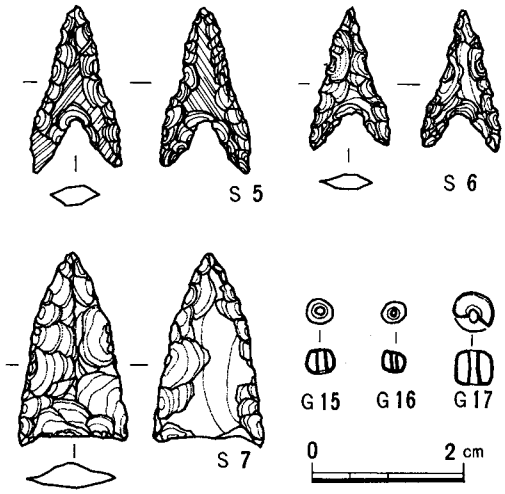


Fig. 13　4号住居址出土遺物実測図（1/1）

石器（Fig. 12－S 4，Fig. 13－S 5～S 7，PL. 14）　出土した石器は石包丁1，石鏃3である。S 4は小豆色を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁で，全体の約3分の1の欠損品であり現存長 3.7cm，幅 4.3cm，厚さ 0.6cmを測る。器面の磨研は良好であるが，刃部は磨耗して丸くなり，稜は鈍くなっている。S 5～S 6は石鏃で，いずれも無茎凹基式のもので，S 5は黒曜石製，S 6～S 7は頁岩製である。S 5は両側面を磨研した局部磨製のもので，腸抉をもつ。長さ 2.2cm，幅 1.2cm，厚さ0.25cmを測る。S 6は打製石鏃で，長さ1.9cm，幅1.0cm，厚さ0.21cmを測る。S 7は腸抉をもたず，長さ 2.6cm，幅1.45cm，厚さ0.34cmを測る。

ガラス製小玉（Fig. 13－G15～G17，PL. 14）　埋土床面近くより3個出土した。いずれもりんご形を呈し，G17が他に比べて大きい。色調もG15～G16はスカイブルーであるが，G17はコバルトブルーである。

5号住居址（Fig. 14，PL. 6）

調査区東南隅において検出し，4号住居址の南方14mに位置している。南側は調査区にかかっており，北西コーナーより約4分の1の範囲を調査したのみである。長軸方位は確実になし得な

いが，北西コーナーと炉址の位置からN18°Eと推定した。大幅に削平されて壁は遺存しておらず，床面も攪乱を受けているが，北側と西側に周溝が遺存しており，平面は隅丸長方形をなすと考えられる。周溝は幅が18.0～15.0cm，深さ 5.0～10.0cm程度で，壁に沿って連続している。検出部における寸法は，北壁長4.45m，西壁長3.70mであり，西側周溝の南端部は別の溝によって切られている。この溝は住居址床面途中で切れているが，西南方へ円くカーブして続いており，幅は30cm内外，深さは6～10cmで住居址の周溝に類似する。他の住居址が重複している可能性がある。床部中央付近には長さ1.20m，幅0.55m，深さ0.12mの断面浅皿状をなす長楕円形の掘り込みが検出され，周囲には焼土塊が散乱していた。炉址であろう。床部には柱穴状の小竪穴を10数個検出したが，住居構築時のものは確定できない。P－10は隅丸方形の平面をなし深さは57cmと深いが，他のピットは円形をなし深さは20cm前後である。P－10は別の掘立柱建物の柱穴と考えられる。本住居址の主柱穴は，他の類例より炉址を挟んで向かい合う位置関係を有するP－1とP－6と考えられる。なお，本住居址にはベッド状遺構などの施設は認められなかった。

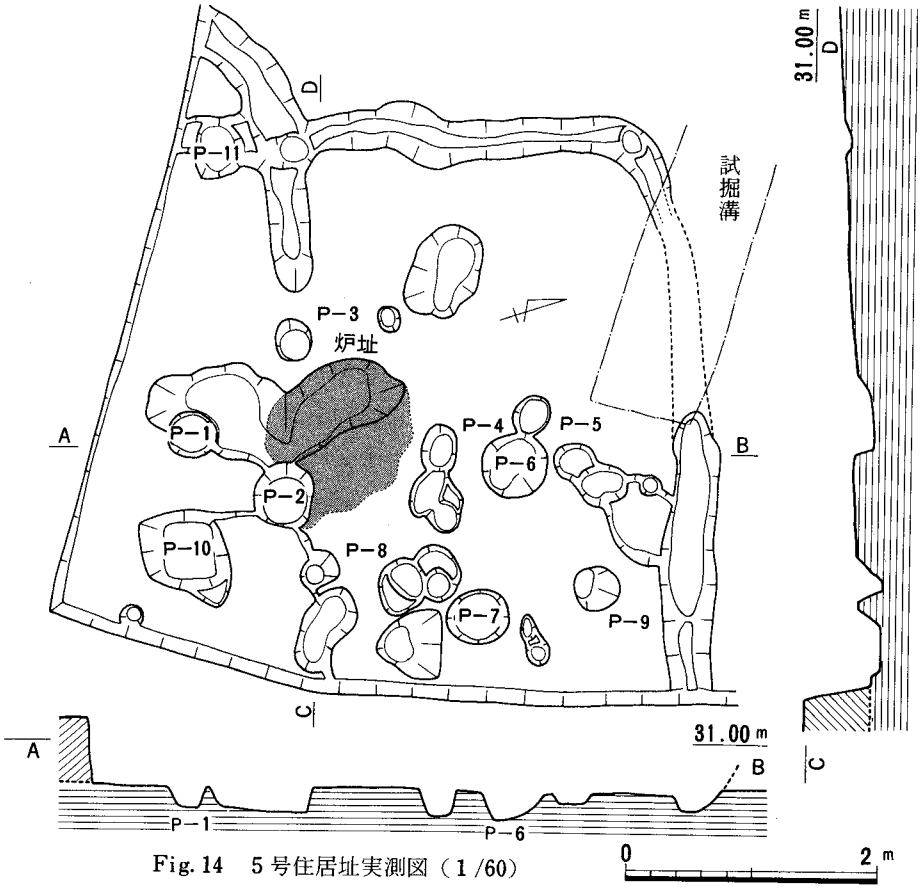


Fig. 14　5号住居址実測図（1/60）

出土遺物（Fig. 15，PL. 12）

削平のため遺物の遺存は極端に少なく，埋土や床面出土のものは無い。全て小竪穴中より出土したもので，弥生土器の細片である。P51は壺形土器の底部片で，平底の底部から円くカーブして体部は立ち上がる。胎土は粗く，焼成ももろい。器面は剝落し，黄褐色を呈する。P52とP53はくの字形に外弯する甕形土器の口縁部片である。P52はやや外弯気味に開く口縁上端をわずかに引き出している。胎土は粗く，焼成も不良で器面の剝落が著しい。P53の口縁部は外弯し，端部はそのままおさめる。胎土，焼成は粗雑で器面は磨滅している。P54は甕形土器，P55は鉢形土器の底部片である。いずれも胎土は粗く，焼成ももろい。器面は剝落し，P54は黄褐色を呈す。

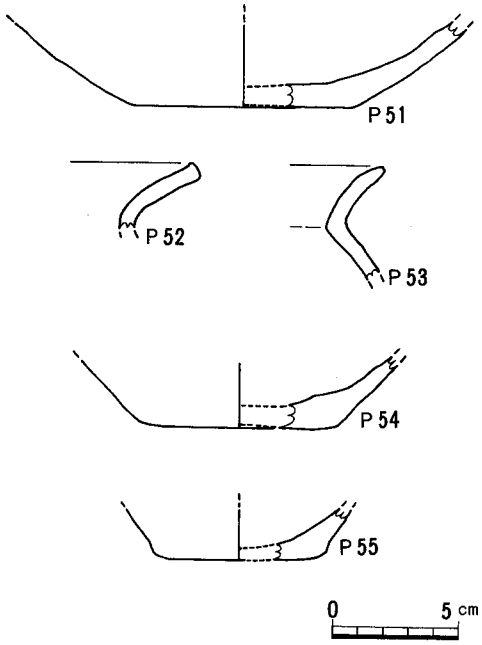


Fig. 15　5号住居址出土遺物実測図II（1/3）

3．溝状遺構

弧状溝　（Fig. 16，PL. 9）

調査区の南側，2号・3号住居址に近接して検出された。西端および東端が試掘時のトレンチによって破壊されているため全体の形状について知ることはできないが，両端部はトレンチの幅内におさまるものと思われる。溝は幅38～50cm，検出面からの深さ31～45cmで，溝壁はやや外広して立上り，断面形はU字形をなす。基底面は，東から西へ除々に低く傾斜しており，西端では東端より－17cmのレベル差がある。遺物からみて，2号・3号住居址と時間差はそうないものと思われ，したがってこれらと関係して付設されたものと考える。削平された高さから本来の溝の形状を推定復元すると，深さ70～80cm，幅70～90cmのU字溝と考えられる。溝内の堆積土の観察からは，排水用として利用されたような土層堆積の流れは観察できないことから，2号・3号住居址の周囲を断続的に巡る溝であった可能性がある。

出土遺物　（Fig. 17，PL. 12）

出土状況　溝の遺存状況から考えて，出土した遺物はすべて溝基底面直上の堆積土内からのものといえる。すべて破片で全体の器形を知りうるものはないが，いずれも弥生時代後期に編年上位置づけられるもので，2号・3号住居址とほぼ同時期と考えられる。

P56～P58は底部破片である。いずれも体部との境はやや不明確で，底部は丸みのある不安

定な平底である。P56は壺形土器，P57・P58は甕ないし鉢形土器の底部と思われる。いずれも胎土が粗く焼成不良である。内面はナデ仕上げで，外面は斜位の目の細かいハケ目調整が施される。P59は鉢形土器の口縁部破片である。復元口径11.9cm。底部からやや内弯気味に体部は立上り，口縁端部は丸くおさまる。内外面とも丁寧なナデ仕上げで，内面には逆時計回りの指頭圧痕が残る。P60は器大である。内外面にシボリ痕が残る。器面はナデ仕上げによるが作りは悪い。

コの字形溝（Fig. 18，PL. 7・8）

4号住居址の北東の位置にほぼ隣接して検出された。検出した当初は埋土（暗褐色粘質土）の平面形から方形の竪穴住居址と考えたが，約10cm掘り下げた時点で，コの字形に溝が巡ることがわかった。溝の幅は東溝で2.38m，北溝2.25m，西溝1.48m，深さは検出面から0.40～0.63mを測り，西溝基底面が東溝のそれよりやや高くなっている。長さは東溝5.60m，北溝と西溝が5.80mを測る。溝断面形は逆台形である。東・西溝は南にゆくにつれ次第にせり上っており，掘り方上端へと続いている。溝内にはⅠ～Ⅴ層の埋土が溝両壁からの自然堆積の状況でみられる。最下層には焼土・木炭片を多量に含んだ赤褐色粘質土が厚さ2～5cmほどで堆積しており，この遺構の性格を考える上で注意される。溝によってコの字形に囲まれている中央の台状部分には，遺構は検出されなかった。土層堆積からみて，西溝西壁は若干削平されていると思われるが，台状部分は削平を受けていないものと考える。したがって本来この部分には遺構はなかったものと考える。溝の形状から一見して，

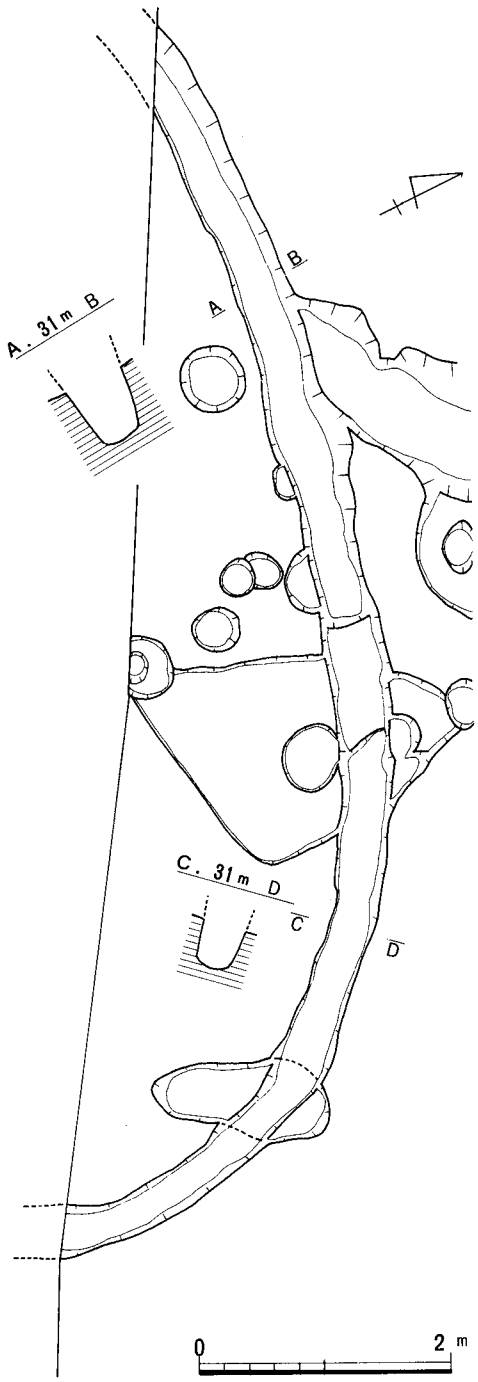


Fig. 16　弧状溝実測図（1/60）

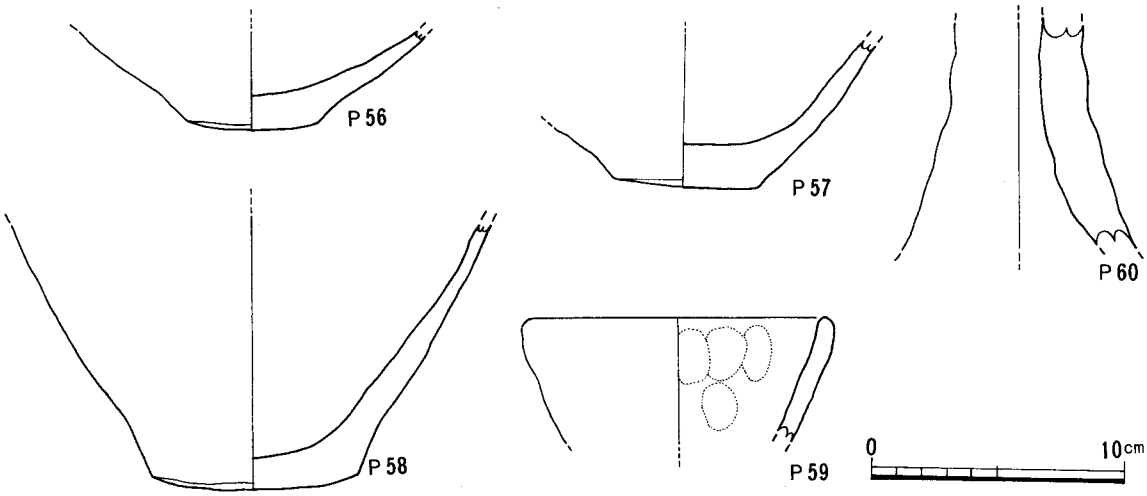


Fig. 17　弧状溝出土遺物実測図（1 / 3）

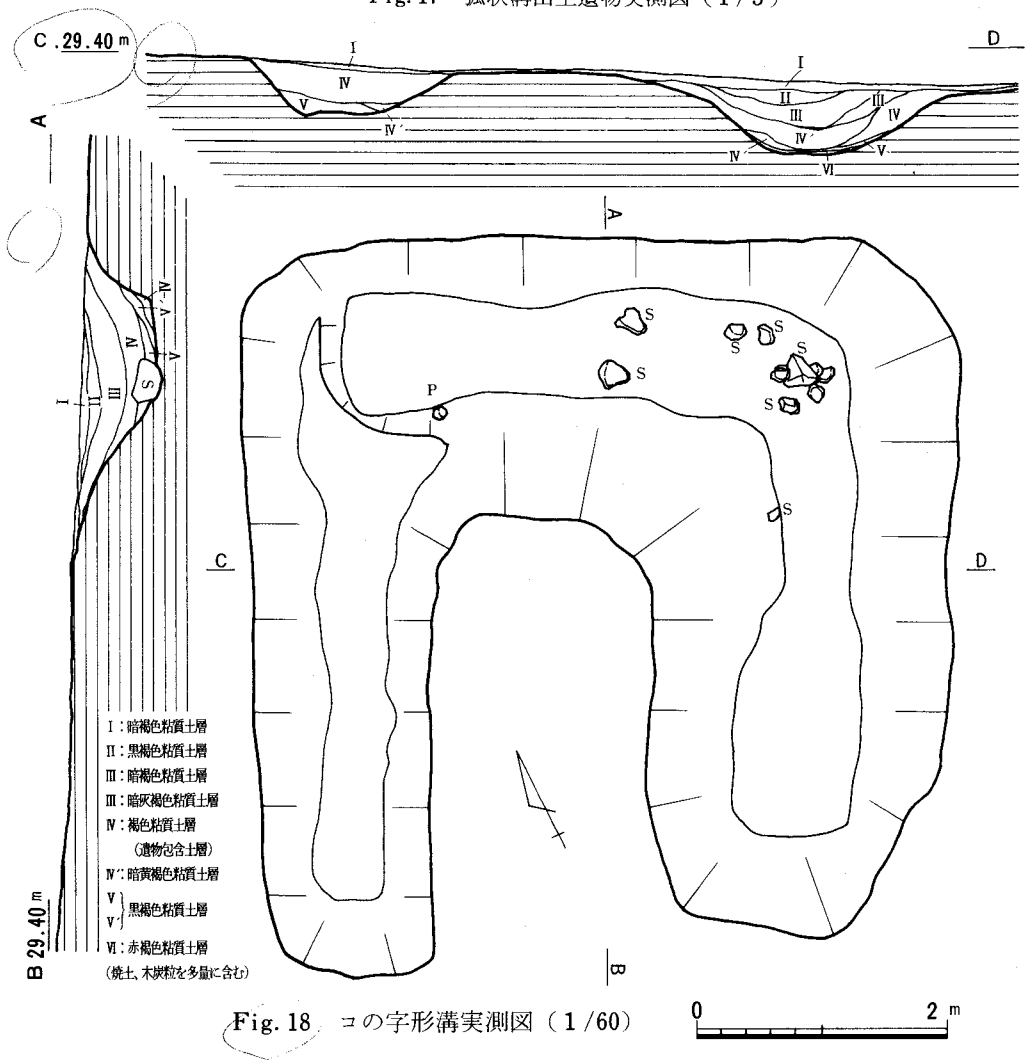


Fig. 18　コの字形溝実測図（1 /60）

方形周溝墓とも思われるが，以上の所見から周溝墓とは考え難い。出土遺物にも祭祀もしくは供献用と思われるものはなく，遺構の性格については明らかにしがたい。

出土遺物　(Fig. 19, PL. 13)

出土状況　溝基底面からはP65のみである。他は第Ⅳ層からの出土である。なお北東隅で基底面から花崗岩角礫が数点出土している。

P61は壺形土器肩部片である。断面台形の突帯を貼付する。P62～P65は底部片である。P62とP65はやや丸味のある不安定な平底で甕形土器底部と思われる。胎土焼成ともに良好。

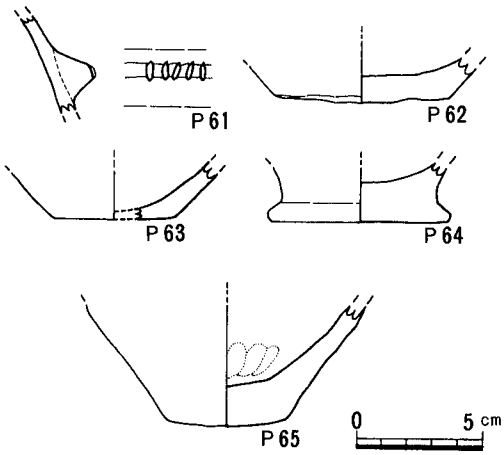


Fig. 19　コの字形溝出土遺物実測図（1/3）

4．掘立柱建物

調査区全域にわたって径20～30cmの平面円形を呈する柱穴状の穴が多数検出されたが，竪穴住居あるいは掘立柱建物を構成するものとして把握しえていない。しかしながら，1～5号竪穴住居址の占地する調査区東南区域において，掘り方の平面形が隅丸方形をなす掘立柱建物の柱穴群を検出した。建物として確認できたのは3棟のみである。これらは調査区東南部に集中する分布状況を示しており，南側未調査区域にも建物が存在すると考えられる。

1号建物　(Fig. 20, PL. 3)

掘立柱建物の中で最も北側に寄っており，3号建物からの距離が約21mの位置にある。桁行方位をN26°30′Wにとる1×2間の建物で，桁行間3.80m，梁間間2.20mの長方形の平面をなす。梁間・桁行間の占有面積は8.36㎡である。桁行柱間の寸法は，P1～P3が1.80m，P2～P4が2.0mで，P3とP4は対称をなしていない。柱穴の掘り方はP1を除いて隅丸方形をなし，一辺は40～60cm，深さは地山を掘り込んでいるP1において50cmである。柱根は遺存しないが，断面観察によれば直径20cm程度の柱材が使用されたと推定できる。6個の柱穴の内，P3～P6が1号住居址の埋土を掘り込んでおり，住居址より新しい構築であることを示している。掘り方からは遺物は出土していない。

2号建物　(Fig. 20)

3号建物の西方9mの位置にあり，桁行方位をN1°Eにとる1×2間の建物で，ほぼ南北に向く。桁行間4.20m，梁間間2.49mを測る長方形の平面をなす。試掘トレンチによって南西隅柱P5は消滅しているが，梁間・桁行間の占有面積は10.45㎡と推定される。桁行柱間寸法は，P1～P3が1.90m，P2～P4が2.20mを測り，P3とP4は対称ではない。柱穴掘り方は隅

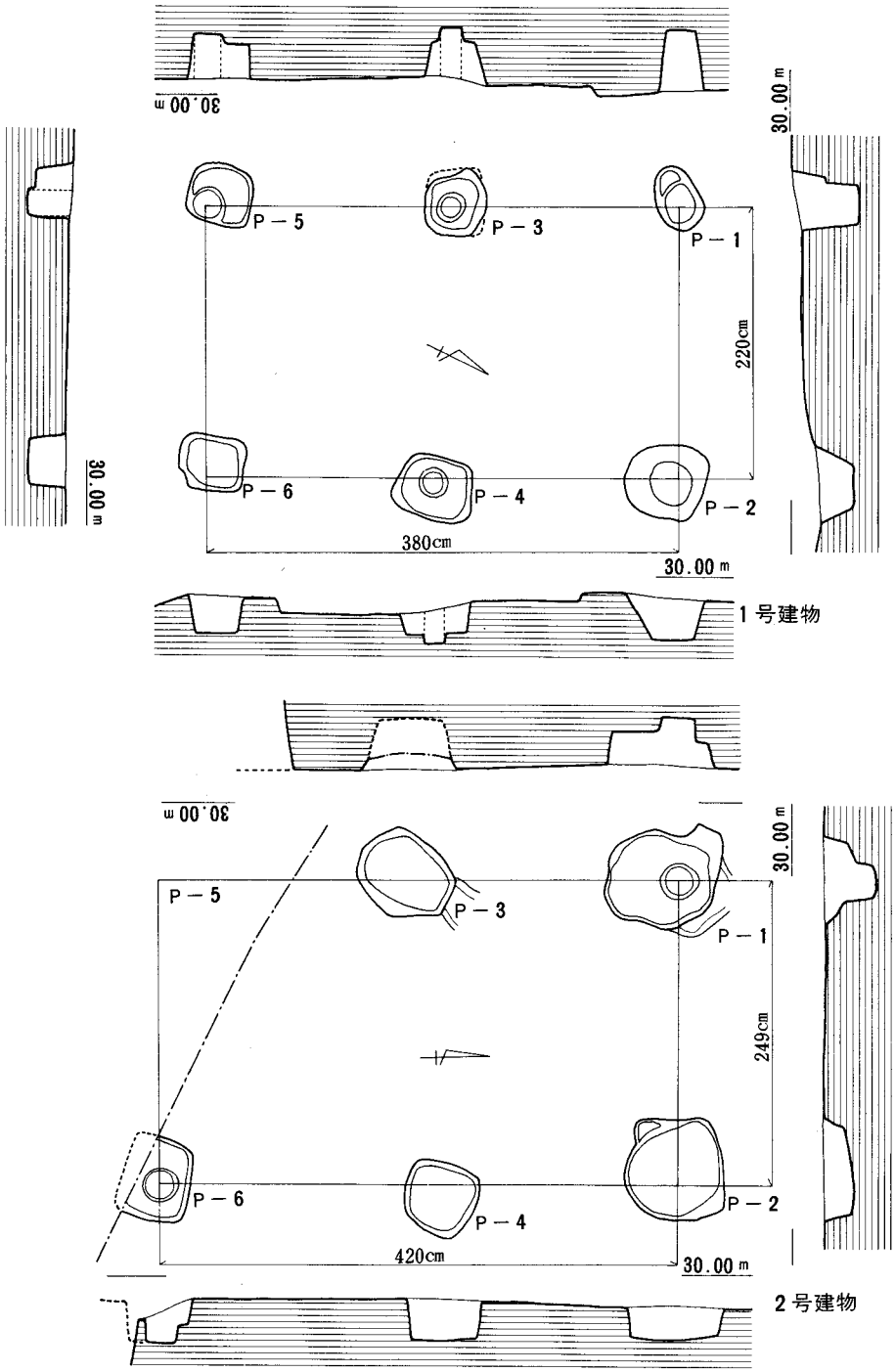


Fig. 20　1号・2号建物実測図（1/60）　0　2m

丸方形の平面をなし，一辺が40～75cmと各掘り方の規模に相違がある。深さは40cm内外であり，柱材は直径20cm程度のものが使用されている。

3号建物　(Fig. 21, PL. 5)

4号住居址の竪穴南半部に重複し，埋土を掘り込んで構築されている1×1間の建物で，桁行方位はN32°20′Eを指す。桁行間2.82m，梁間間1.90mを測り，梁間・桁行間の占有面積は5.36㎡である。柱穴掘り方は，平面形や規模において1号建物と大差ない。P3を除きいずれも他の柱穴掘り方と切り合っている。P1とP2は別の柱穴状竪穴の埋土を切り，P4は4号住居址の貯蔵穴埋土を切っている。さらに，P4が埋まった後に別の隅丸方形の竪穴に切られているが，これらは建物として把握できなかった。P1の柱抜き痕から坩形土器が4点出土した。

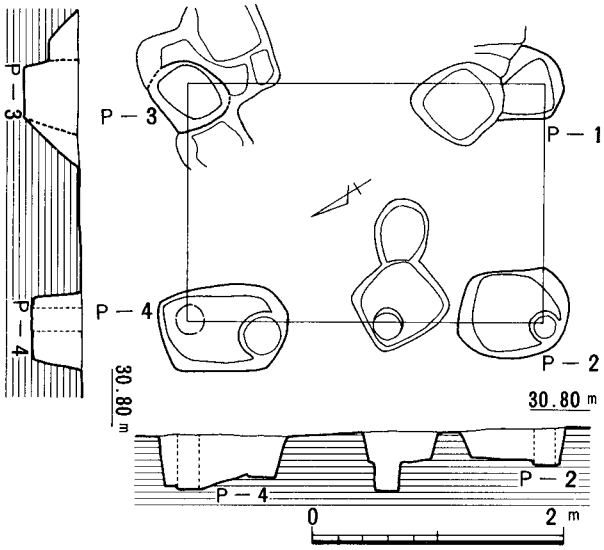


Fig. 21　3号建物実測図（1/60）

出土遺物　(Fig. 22, PL. 13)

P1の柱抜き痕内に4個が重なった状態で出土した。いずれも坩形土器であり，P67～P69は完形品，P66は口縁部から体部を欠失する。P66は口径 7.2cm，器高 3.0cmを測り，丸底の底部から内弯気味に体部は立ち上がり，口縁をそのままおさめる。P67は口径 7.8cm，器高3.7cmを測り，P66に比べ器高が高くなっている。P68は口径 8.2cm，器高 4.4cmを測り，尖底気味の底部から内弯しつつ体部が立ち上がる。器肉はやや薄くなる。P69は口径 9.6cm，器高4.5cmを測り，丸底の底部からほぼ直線的に体部は外開し，口縁端をそのままおさめる。これらはいずれも手づくねのもので，胎土に細かい砂粒を含み精良である。焼成は不良で，器面に網目状の細かいヒビ割れが認められ，全体にもろく器面は磨滅が著しい。

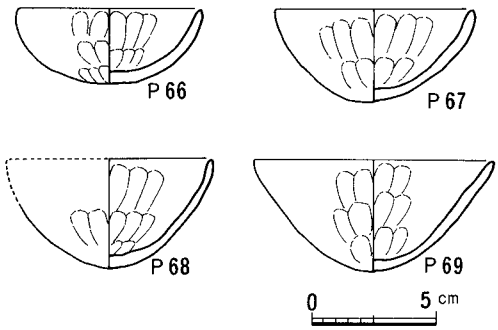


Fig. 22　3号建物出土遺物実測図（1/3）

5．竪穴遺構

調査区東北寄りに比較的近接した位置関係をもって，2基の竪穴遺構を検出した。壁面が焼土化

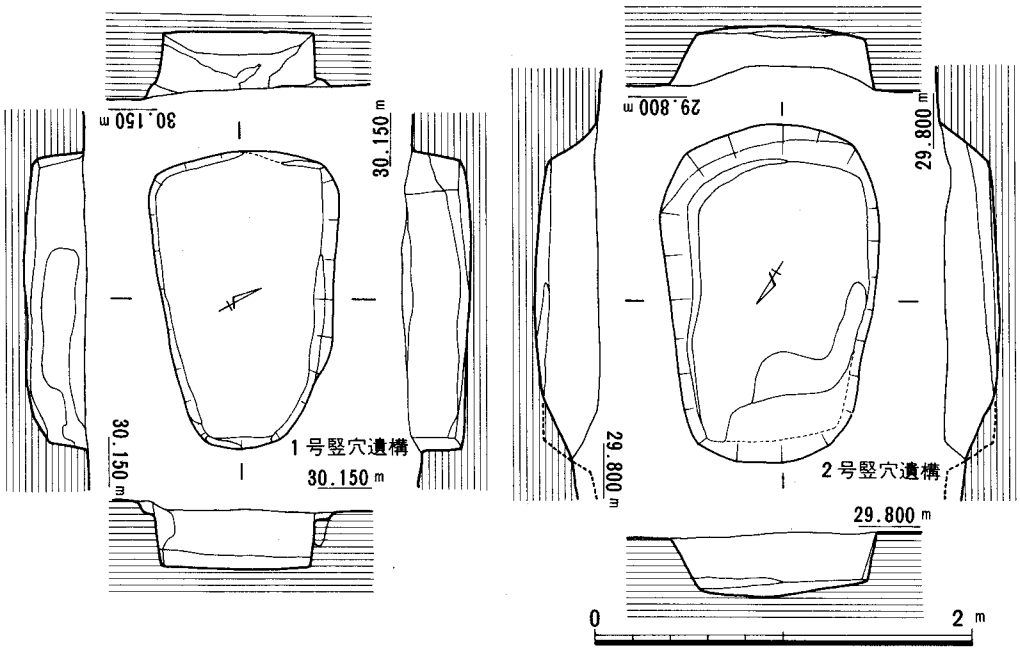


Fig. 23　1・2号竪穴遺構実測図（1/40）

し，埋土に炭化物が多量に混在する特殊な遺構で，検出したのは2基のみである。少なくとも調査区内においては，他に類似の遺構は皆無であり，群をなして存在する遺構ではない。

1号竪穴遺構（Fig. 23の1，PL. 9・10）

主軸をN62°Wにとり，平面形が長台形をなす竪穴で，1号住居址の埋土を掘り込み，さらに1号建物の柱穴P－4を切っている。主軸の長さ1.50m，長幅0.83m，短幅0.30mを測る。周壁はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれており，壁高は0.22～0.32mである。床面は船底状を呈し，中央部に向って傾斜している。周壁は2～6cmの幅で赤く焼けているが，粘土を張ったような状態ではなく，素掘りの壁面が焼土化したものである。埋土には炭化物や壁面が崩落した焼土塊が多く混入し，床面近くには木炭が層をなしている。埋土上層中から弥生土器の破片が30点出土したが細片のため図示できない。

2号竪穴遺構（Fig. 23の2，PL. 10）

1号竪穴遺構の北北西約3.40mの位置にあり，主軸をE29°Sにとる。平面は隅丸長台形を呈するが周壁は円味を持っている。主軸の長さ1.80m，長軸1.23m，短幅0.70mを測る。周壁の掘り込みは1号と同様であるが，短壁両側とも壁面が崩壊しており，現状はゆるやかに傾斜する。壁は帯状に焼土化し，埋土は床面近くに崩落している。床面は船底状をなし，中央部での深さは0.30m程である。埋土中に多量の木炭を含み，床面には厚く堆積している。埋土中から弥生

土器の破片６，石包丁片１，鉄滓１が出土した。

出土遺物（Fig. 24, PL. 13～14）

図示しうる弥生土器片はＰ70のみである。Ｐ70は甕形土器の底部片であり，平底をなす。胎土に粗い砂粒を多く含み，焼成はもろく，黄褐色を呈す。Ｓ８は石包丁の半欠品で，小豆色を呈する輝緑凝灰岩を素材とする。現存長 4.5cm，幅 4.6cm，厚さ 0.6cm を測る。磨研は丁寧に施され，光沢がある。孔は両面から穿たれている。鉄滓（Ｉ３）については分析が未了なので別途報告する。

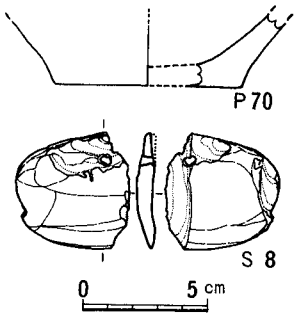


Fig. 24　２号竪穴遺構
出土遺物実測図（１/３）

６．その他の遺物

調査区全域のピット埋土の中から，弥生土器，土師器，須恵器，青磁の破片などが出土したが，細片のために図示できるものは少ない。また，鉄鏃１点，黒曜石製の石器類もピットから少量出土した。土器類については弥生土器の量が圧倒的に多く，須恵器，青磁類は極少である。

土器（Fig. 25, PL. 13）

Ｐ71は高杯の杯部破片で，復元口径は20.6cmを測る。外開する体部上位に段をつくって口縁部が直立し，口縁端を丸くおさめる。器面の剝落が著しく調整痕は明らかでない。胎土は砂粒を含んで粗く，焼成はもろい。黄褐色を呈す。Ｐ72は鉢形土器の破片で，復元口径26.0cmを測る。外弯して開く口縁部から鈍い稜をつくって体部がすぼまる。ハケ目調整を施し，焼成は普通で，赤褐色を呈する。Ｐ73は短頸壺の破片であり，復元口径 9.0cmを測る。球形の体部から短かい口縁を直口気味に引き出している。胎土は粗く焼成も不良で，黄褐色を呈す。器面の剝落が顕著であるが，内面に指頭の指圧痕が残る。Ｐ74は壺形土器の口頸部の細片で，くの字形に外開する口縁端を細く丸くおさめ，頸部に断面三角形の突帯をめぐらす。胎土は粗く焼成は普通で，黄褐色を呈す。Ｐ75は壺形土器の体部片で，肩部に三角突帯をめぐらす。Ｐ76～Ｐ80は壺形土器，甕形土器の底部であり，平底をなす。いずれも器面の剝落が著しく調整痕は不鮮明であるが，Ｐ79はナデ調整，その他はハケ目調整を施す。Ｐ81は高杯の接合部付近の破片かあるいは別の器種かも知れない。外面はハケ目，内面はナデ調整を施し，焼成は内部まで及ばず，断面は灰色を呈す。Ｐ82～Ｐ84は高杯の脚部片で，杯部は剝落しており，頂部は成形時の状態を残している。脚はいずれもラッパ状に外開するものである。いずれも器面の磨滅が著しく調整痕は不鮮明である。胎土は精良で，焼成は普通，Ｐ82～Ｐ83は黄赤褐色，Ｐ84は黄褐色を呈す。前二者は弥生土器，後者は土師器である。Ｐ85は器台の破片であり，脚端部の復元径は10.0cmを測る。外面はハケ目調整，内面は指頭の押圧痕の上から部分的にハケ目を施す。胎土に砂粒を多く含み，焼成は普通，器面は黄赤褐色を呈す。

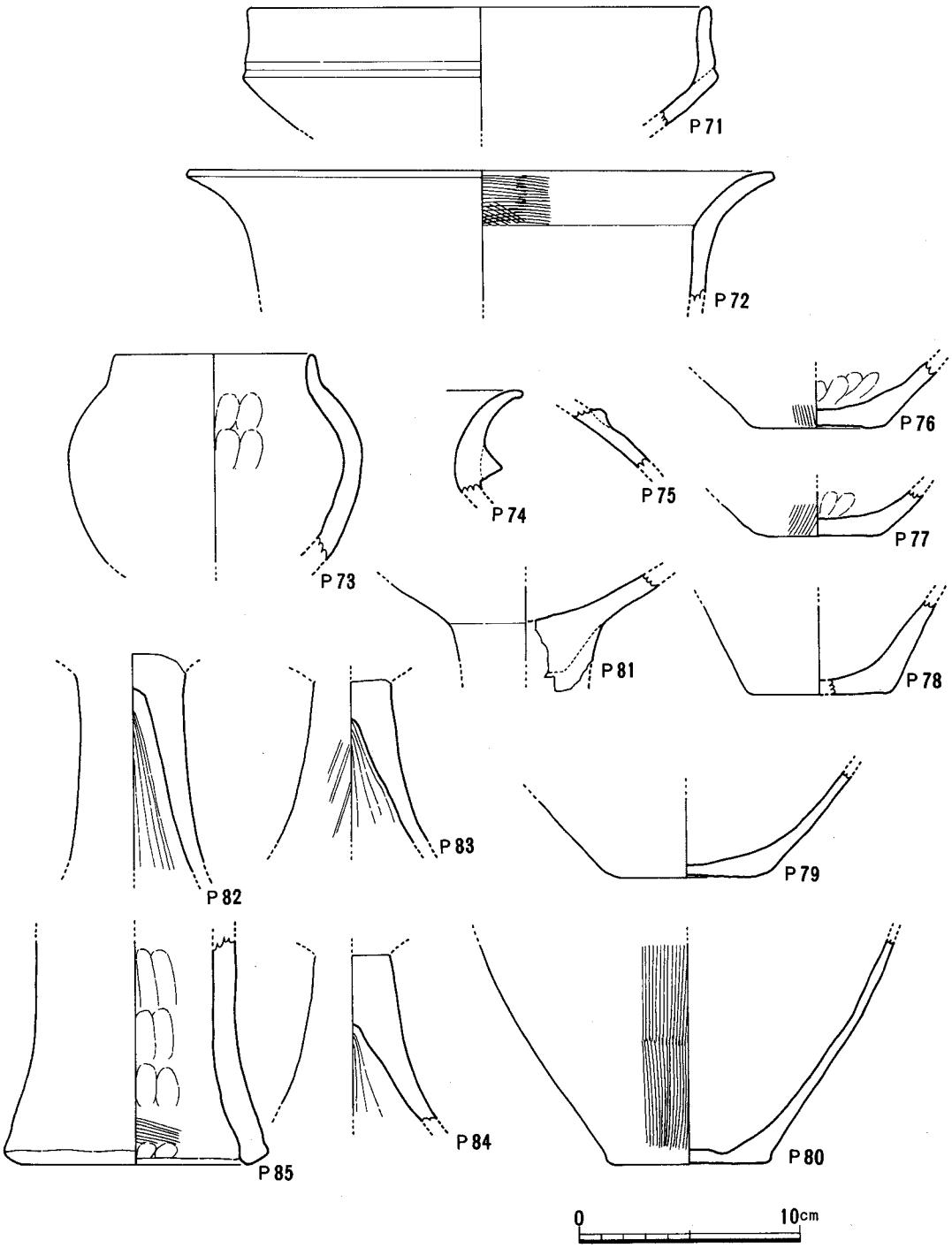


Fig. 25　各ピット出土遺物実測図（1 / 3）

鉄器・石器　(Fig. 26, PL. 14)

Ｉ２は片丸造りの柳葉形鉄鏃である。先端部が欠損している。現存長 5.4cm，幅 1.7cm，厚さ 0.4cmを測る。箆被と身との境には幅１mmの突起帯がみられる。Ｓ９～Ｓ12は黒曜石製の石鏃である。Ｓ９は長さ 1.0cm，復元幅 1.8cm，厚さ 0.3cmで，逆刺が左右とも欠損している。側縁からの二次調整剥離は身の中央の鎬を意識して細かな押圧剥離が施されている。腸抉は深い。Ｓ10は復元長 2.5cm，幅 1.5cm，厚さ0.25cmである。逆刺は長く作り出しており，腸抉は深い。Ｓ９・Ｓ10は一般的に押型文土器と共伴する石鏃である。Ｓ11は長さ２cm，幅 1.2cm，厚さ0.3 cmで，腸抉は浅く，Ｓ９・Ｓ10と比べ作りが荒い。二次調整は縁辺部のみに限られ，側縁はかなり凹凸に富む。Ｓ12は復元長 3.1cm，幅 2.7cm，厚さ0.45cmの大型の石鏃で，側縁・腸抉の二次調整が顕著でないことから未成品と考えられる。Ｓ13はナイフ形石器で基部が欠損している。切り出し形の形状をなすものと思われる。刃潰し調整は約85°の角度で最終剥離面側から施こされている。器面の風化は浅い。漆黒色半透明の良質な黒曜石を素材とする。Ｓ14は細石刃で，基部および先端部が表面からの加圧によって折損している。現存長 1.4cm，幅 1.2cm，厚さ0.15cm。表面の風化は浅い。灰黒色のやや質の悪い黒曜石製である。

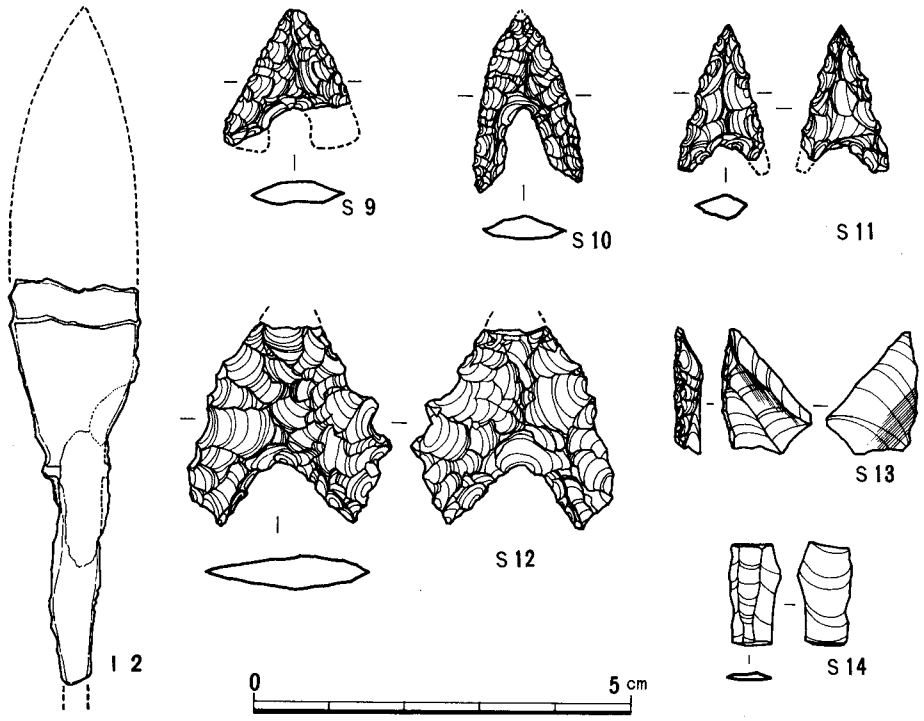


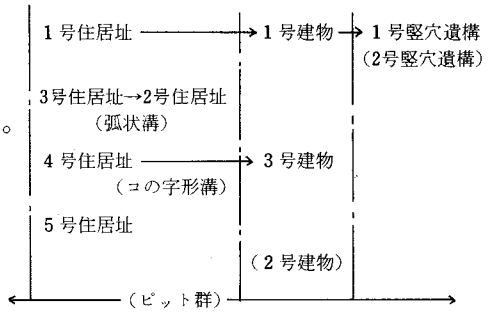
Fig. 26　各ピット・表土出土遺物実測図（1/1）

Ⅳ．ま　と　め

以上の調査の結果を踏まえ，若干の考察を行ないまとめとする。

本遺跡は舌状台地鞍部に立地した弥生時代後期の集落址を主体とする。今回の調査地点は集落址の北西隅にあたり，さらに遺構は南側の台地基部へ展開するものと考えられる。今回の調査では集落規模，構造の全体的な在り方については把握できなかったが，その一端を明らかにしたと考える。

遺構の先後関係　切り合い及び遺物からみた先後関係は右のようになる。当遺跡の営まれた時期については少なくとも3期にわたると考えられる。すなわち，第Ⅰ期は竪穴住居址（1号～5号）・弧状溝・コの字形溝のグループ，第Ⅱ期は1号～3号建物等の倉庫群，第Ⅲ期は1号・2号竪穴遺構の時期である。なお，ピット・不定形土坑は第Ⅰ期以前のものも含んで，全時期を通じてみられるが，時期毎のピット間の関係については明らかにできなかった。



遺構の時期　Ⅰ期については，1号・2号住居址床面出土の遺物から編年的位置づけができ

	弥生土器							土師器						須恵器	青磁	石器								その他		
	壺	甕	鉢	高杯	坩	脚付鉢	器台	壺	甕	坩	高杯	皿	高台付椀			ナイフ形石器	細石刃	打製石鏃	半磨製石鏃	石包丁	石錘	黒曜石剝片	サヌカイト	鉄鏃	鉄滓	ガラス小玉
1号住居址	○	○	○															○	○	○						○
2号住居址	○	○	○			○	○				○										○			○		
3号住居址		○	○																							
4号住居址	○	○	○		○													○	○	○		○	○			○
5号住居址	○	○																								
1号建物																										
2号建物																										
3号建物										○																
弧状溝	○	○	○				○																			
コの字形溝	○	○	○											○												
1号竪穴遺構		○																								
2号竪穴遺構			○																	○					○	
各ピット	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		○		
表土																						○	○	○		

Tab. 2　遺構別遺物出土状況一覧

る。1号住居址床面出土のP1・P3・P5・P7，2号住居址床面出土のP9・P10・P28・P36は弥生時代後期後半に位置づけられる。3号住居址土坑基底面出土のP39も同時期と考える。4号・5号住居址については床面出土の遺物に欠けるために明確ではないが，住居址の構造と規模から考えて1号～3号住居址とほぼ同時期と考えられる。なお弧状溝は2号・3号住居址に付設された溝と考えられる。コの字形溝については，4号住居址との位置関係からみて，同時に存在したとは思われない。すなわち4号住居址の家屋構造の復元を通して考えた場合，上屋端部がコの字形溝の一部にかかるためである。先後関係については不明であるがいずれにせよ，溝基底部から出土したP65をもってコの字形溝はI期とすることができよう。II期について時期比定の目安となる遺物は，3号建物の柱根抜痕出土のP66～P69がある。いずれも坩形土器で，形態的変化に乏しいため時期比定は難しいが，古墳時代初期に位置づけられよう。III期に属する1号・2号竪穴遺構からは時期の決め手となる遺物は出土していない。この種の遺構が検出されているのは，西区徳永アラタ古墳群，広石古墳群，三郎丸古墳群などからであり，いずれも古墳時代後期群集墳に伴なうか，若干下る時期にみられるものである。現段階では，この種の遺構の初現期については明らかにしがたいが，古墳時代後期以降と考えられる。

竪穴住居址の構造について　1号～5号住居址はいずれも長方形の竪穴をもつ住居址である。規模もほぼ同じくし，竪穴中央に地床炉を設け，炉に近接して貯蔵穴と思われる土坑を有する共通性をもつ。ベッド状遺構が確認されたのは1号・2号住居のみであるが，5号住居址にも付設されていた可能性がある。主柱は竪穴四隅に配するもの（1号・3号），炉をはさんで竪穴長軸上に2本設けるもの（4号），炉址周辺に4本配するもの（2号）など，上屋構造の面からは若干の差異が認められるが，これらの諸特徴はいずれも弥生時代後期後半に一般的にみられる家屋構造を示す。なおこれらの住居址群の存続期間は短かく，当遺跡に隣接して，ほぼ同時期に営まれ，古墳時代以降も存続する野方中原遺跡の集落の在り方とは異なる点が指摘できる。このことは弥生時代後期後半以降に土地利用の変化が生じたものか，あるいは遺跡それ自体の性格の差異を表わしたものか問題が残るが，現段階では明らかにしがたい。

出土遺構	実測番号	径 mm	厚さ mm	孔径 mm	材質	色調	備考
1号住居址	G1	3.8	3.9	1.2	ガラス	スカイブルー	床面出土
	G2	3.5	2.1	1.1	〃	〃	
	G3	3.8	2.3	1.2	〃	〃	
	G4	3.6	3.0	1.2	〃	〃	
	G5	3.8	4.0	1.8	〃	〃	
	G6	3.9	2.9	1.1	〃	〃	
	G7	3.8	2.9	1.4	〃	〃	水洗選別
	G8	3.3	3.1	1.2	〃	〃	
	G9	4.0	3.6	1.1	〃	〃	
	G10	3.2	3.9	1.3	〃	〃	
	G11	3.5	3.1	1.1	〃	〃	
	G12	3.6	3.1	0.9	〃	〃	
	G13	3.5	3.1	1.1	〃	〃	
	G14	3.3	2.9	1.2	〃	〃	
4号住居址	G15	3.8	3.1	1.1	〃	〃	水洗選別
	G16	3.2	2.9	0.9	〃	〃	
	G17	5.1	4.6	1.1	〃	コバルトブルー	

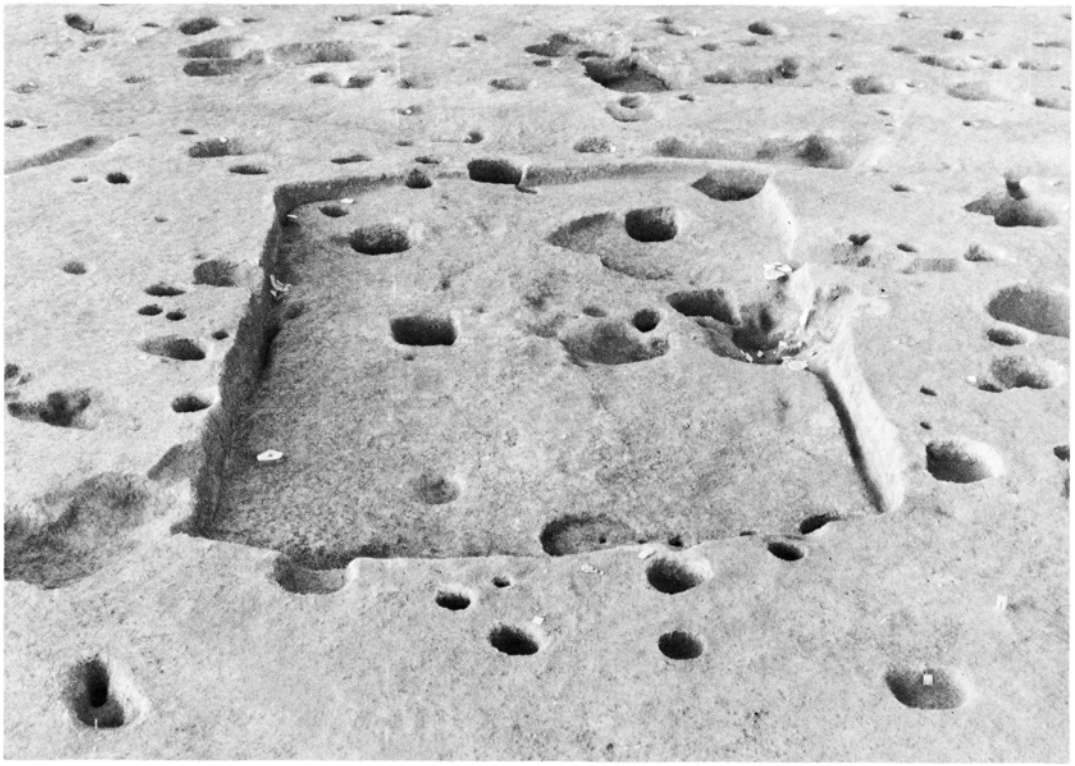
Tab. 3　ガラス製小玉計測表

PLATES

（上） 野方勧進原遺跡遠景（北西から）

（下） 野方勧進原遺跡近景（南から．調査終了後）

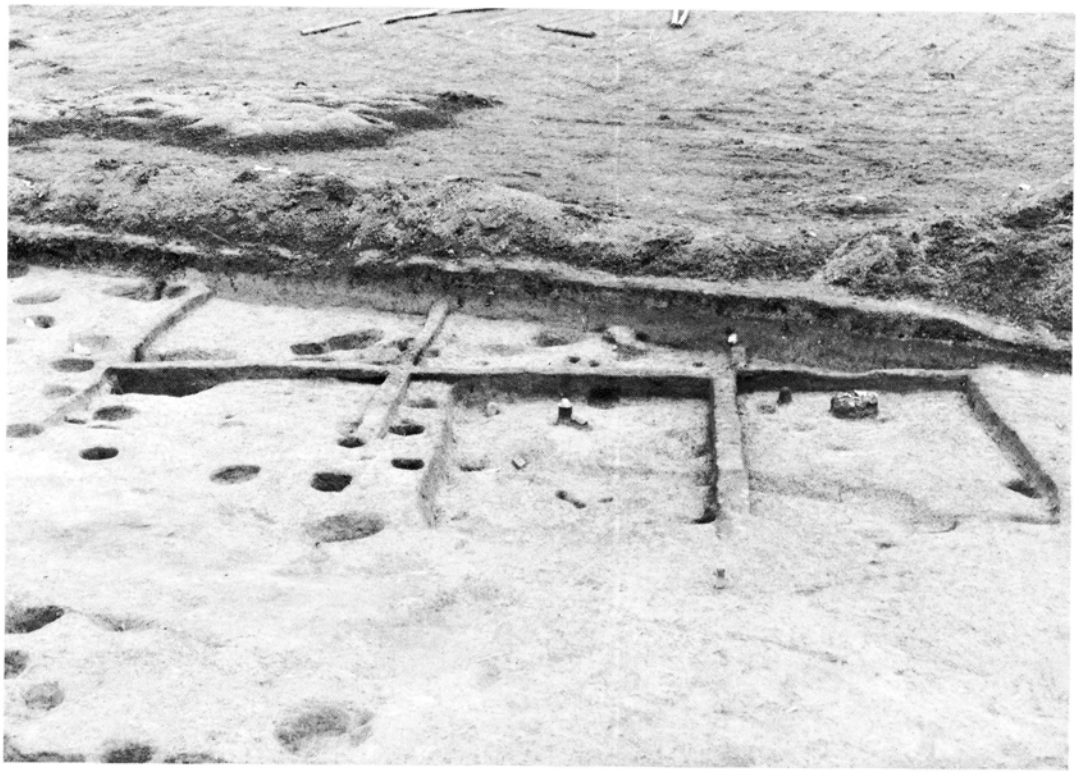
（上）　1号住居址調査状況（南から）



（下）　1号住居址完掘状況（南から）

（上）　1号住居址完掘状況（西から）

（下）　2号・3号住居址調査状況（東から）

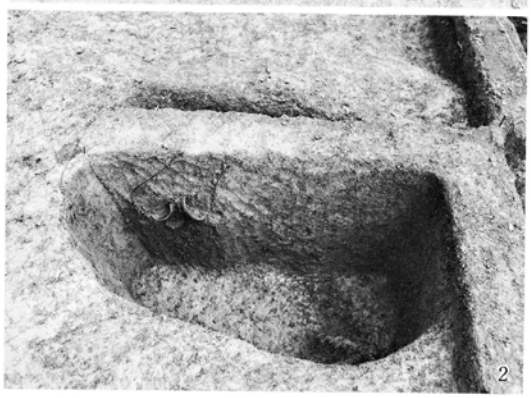


（上）　2号・3号住居址調査状況（北から）

（下）　2号・3号住居址完掘状況（北から）

（上） 4 号住居址完掘状況（西から）

（下） 4 号住居址完掘状況（北から）



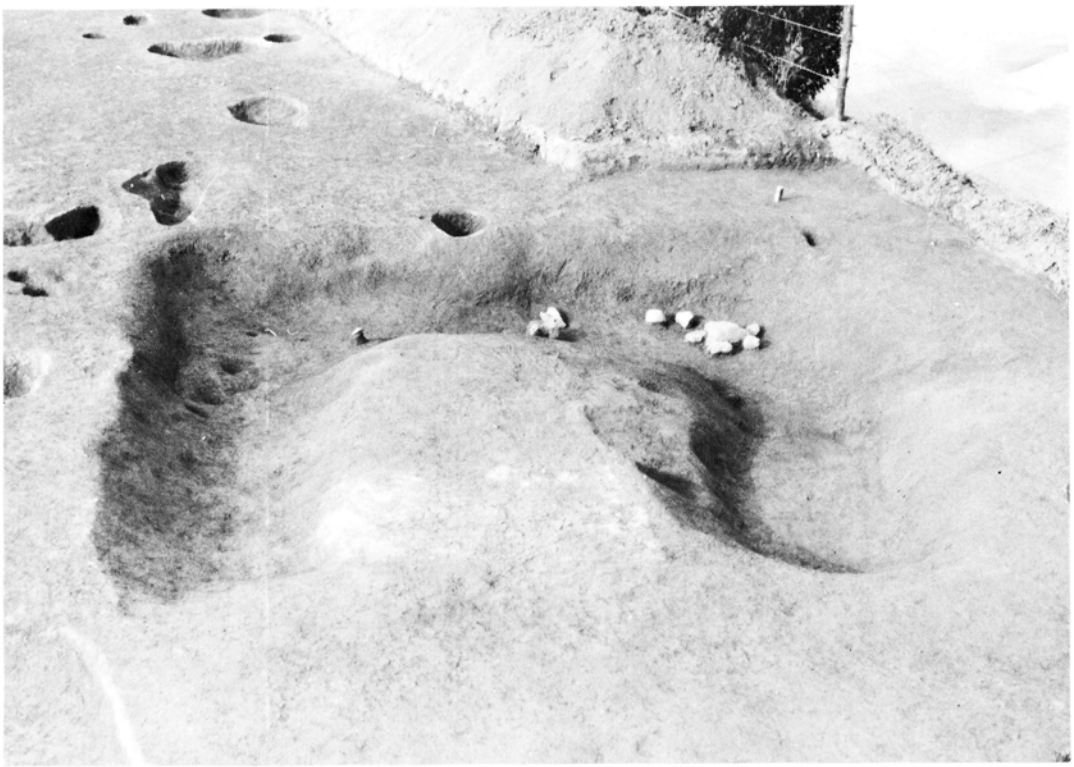
(1) 4 号住居址土拡遺物出土状況

(2) 4 号住居址内ピット遺物出土状況(西から)

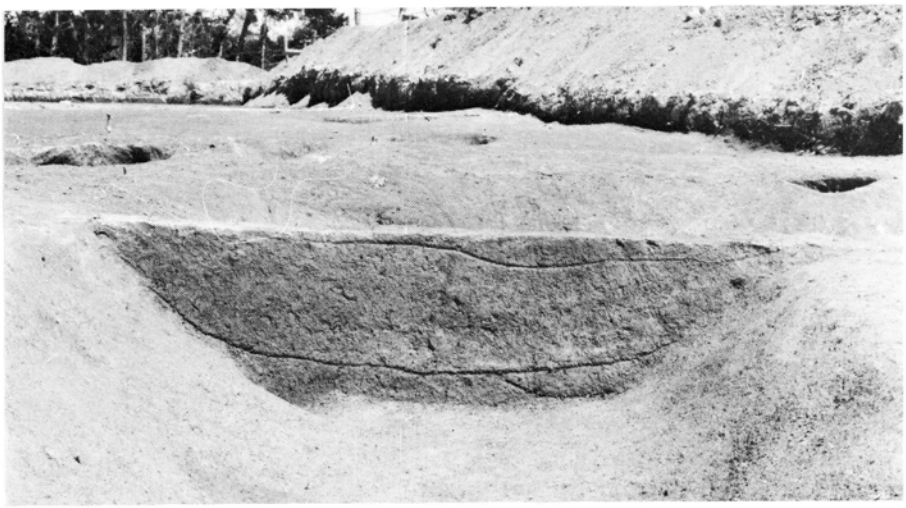
(3) 3 号建物柱穴内遺物出土状況(西から)

(4) 5 号住居址完掘状況(西から)

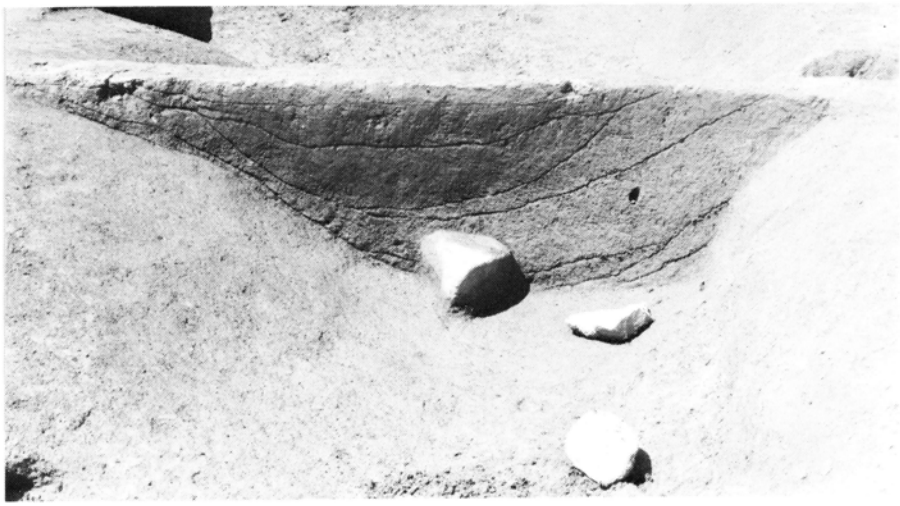
（上）　5号住居址完掘状況（北から）



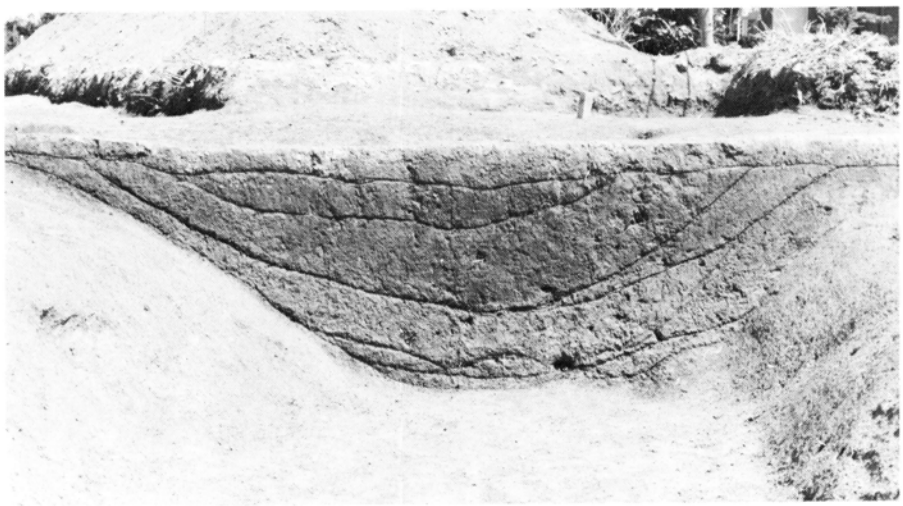
（下）　コの字形溝完掘状況（南から）



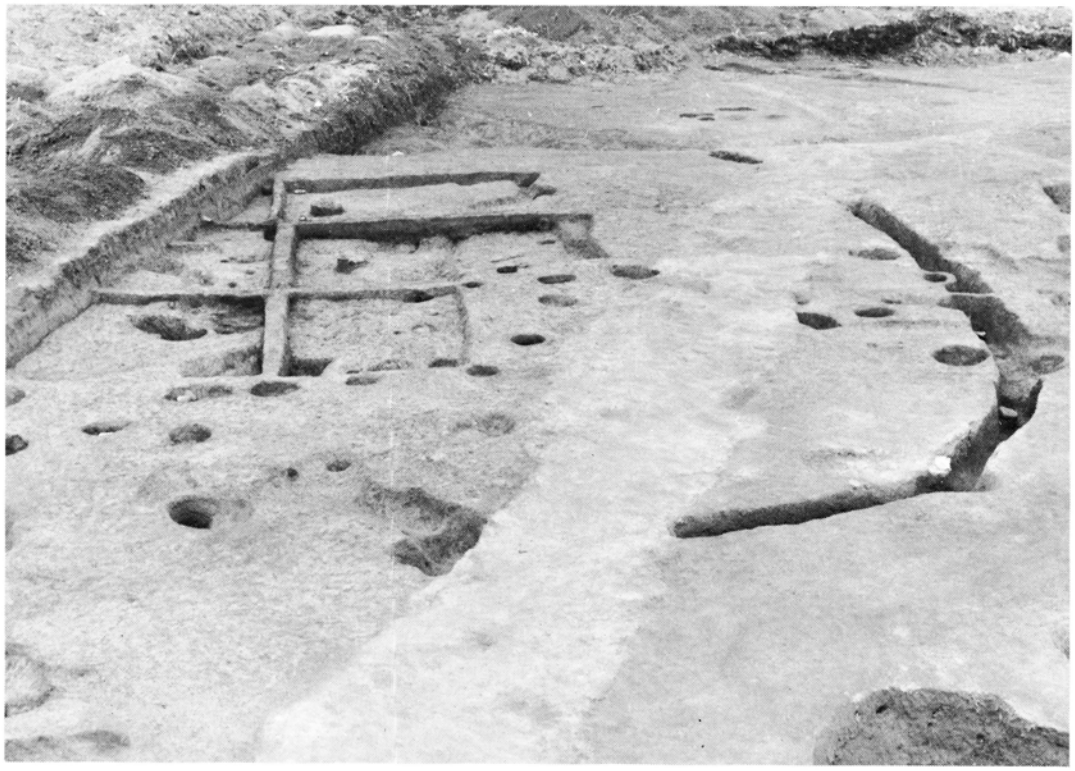
（上） コの字形溝土層断面Ⅰ区（南から）



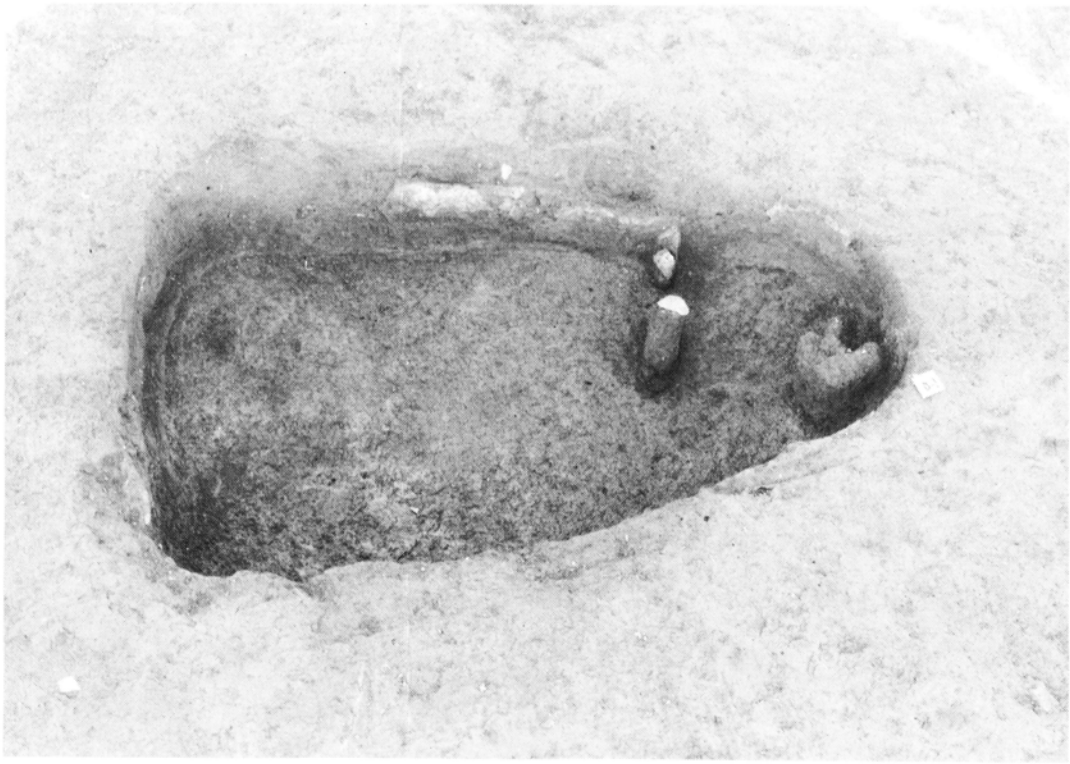
（中） コの字形溝土層断面Ⅱ区（東から）



（下） コの字形溝土層断面Ⅲ区（南から）

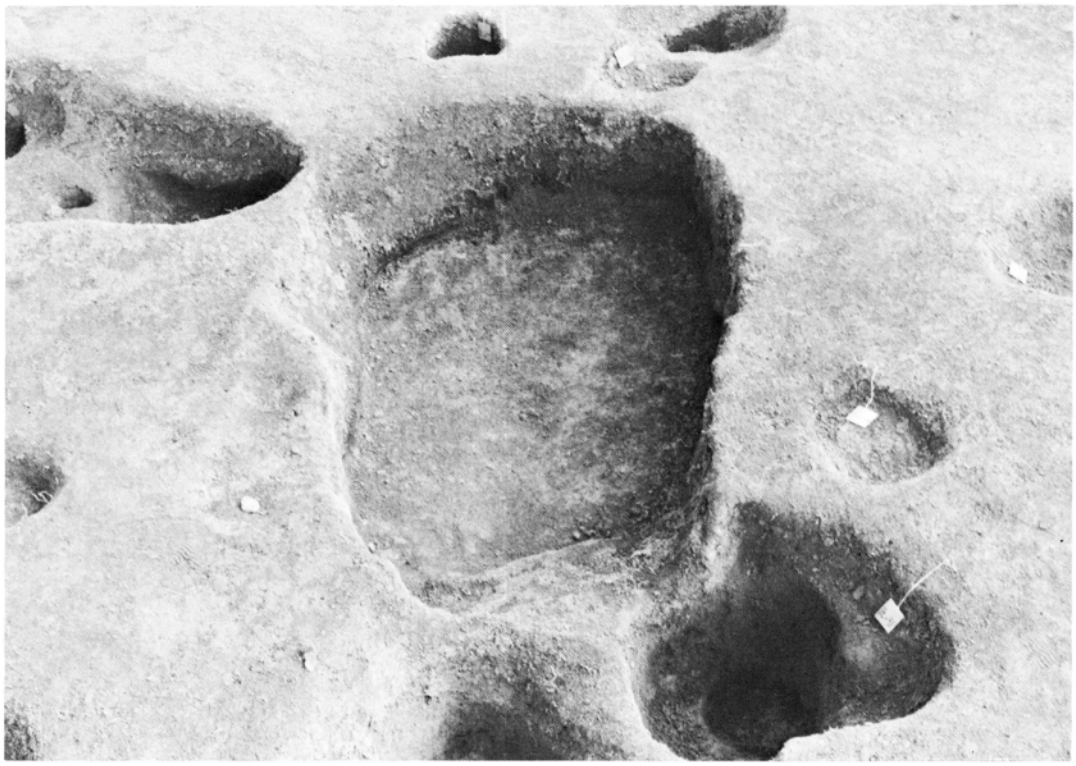


（上）　2・3号住居址および弧状溝（東から）

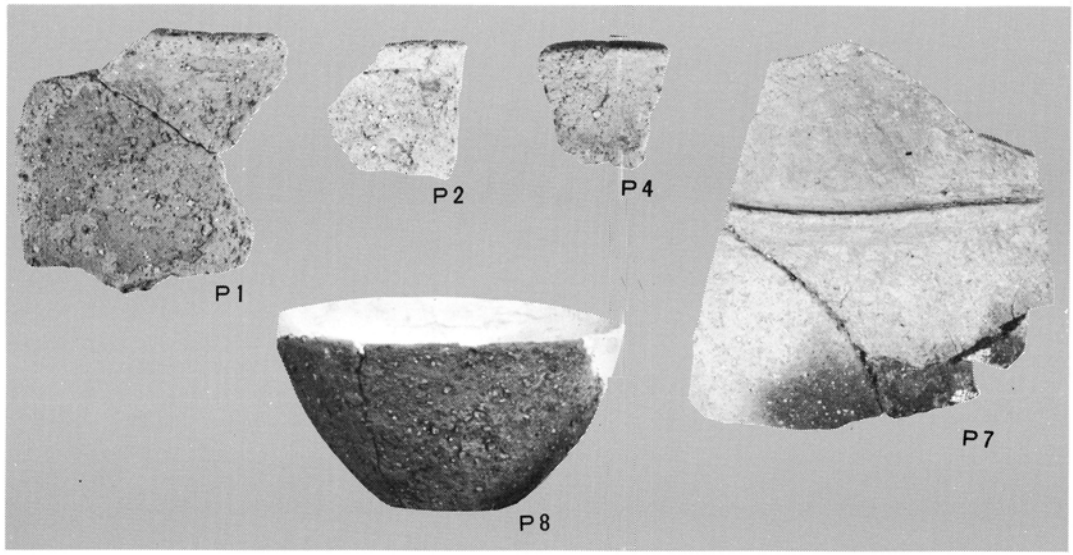


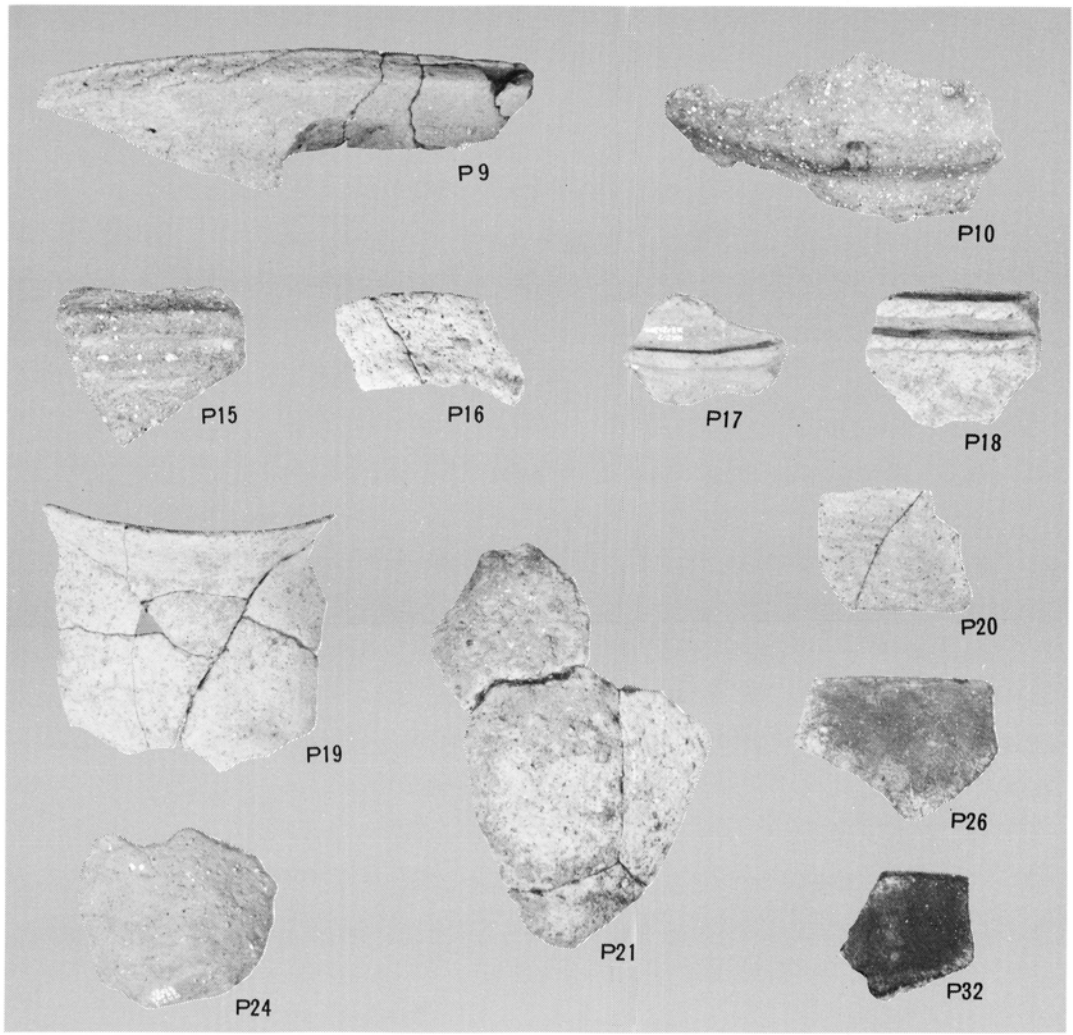
（下）　1号堅穴遺溝（南から）

（上）　1号堅穴遺構（北西から）

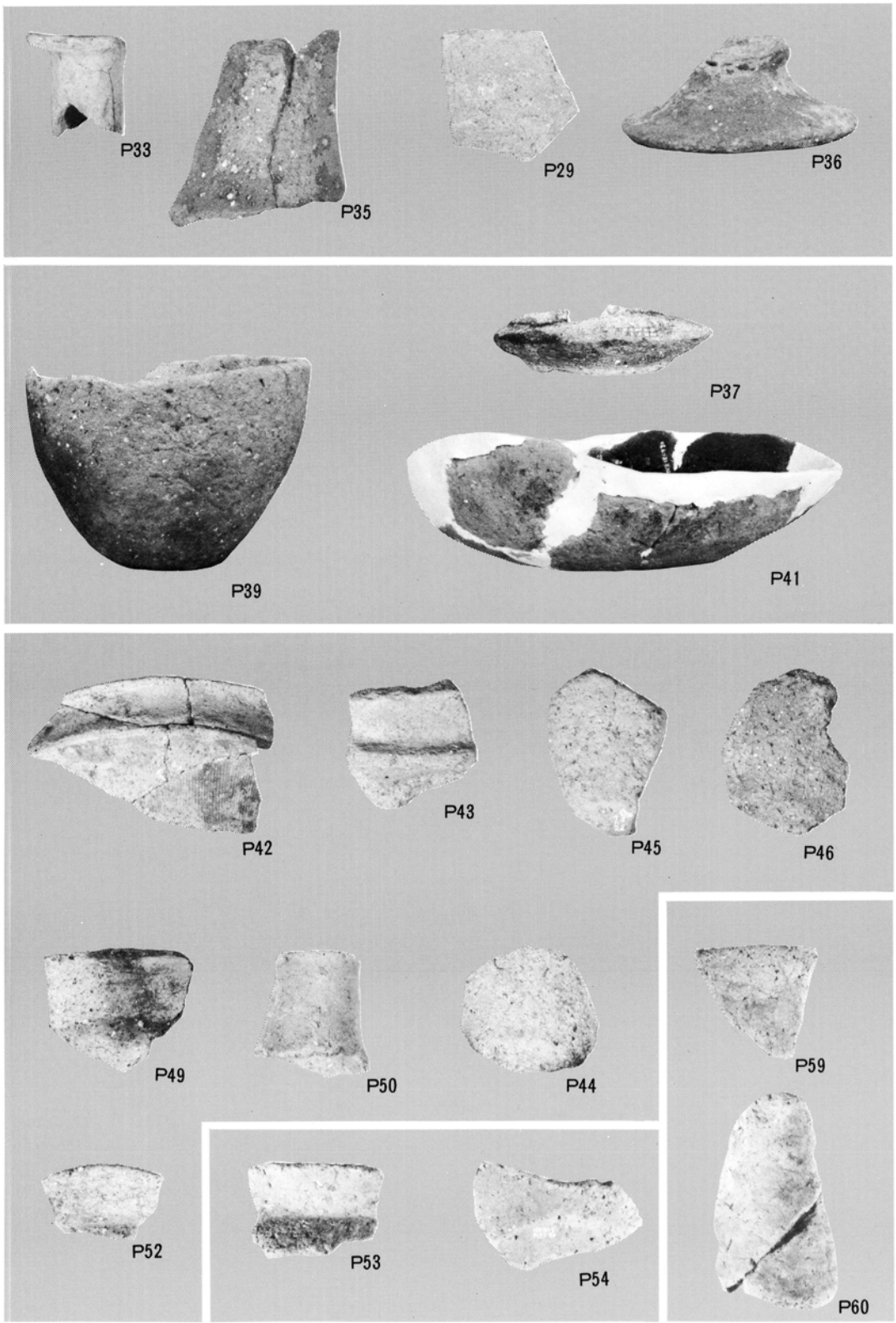


（下）　2号堅穴遺構（北から）

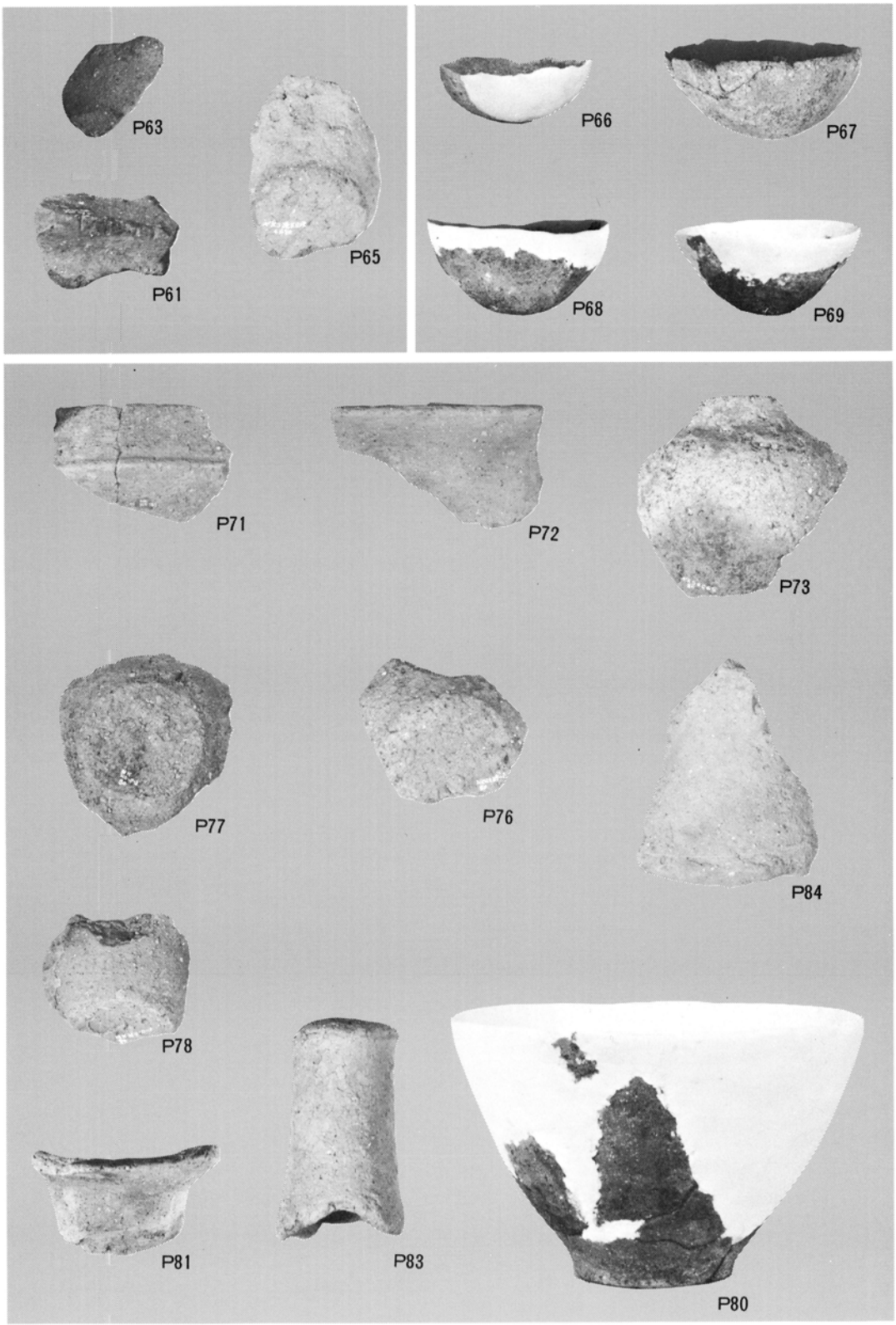




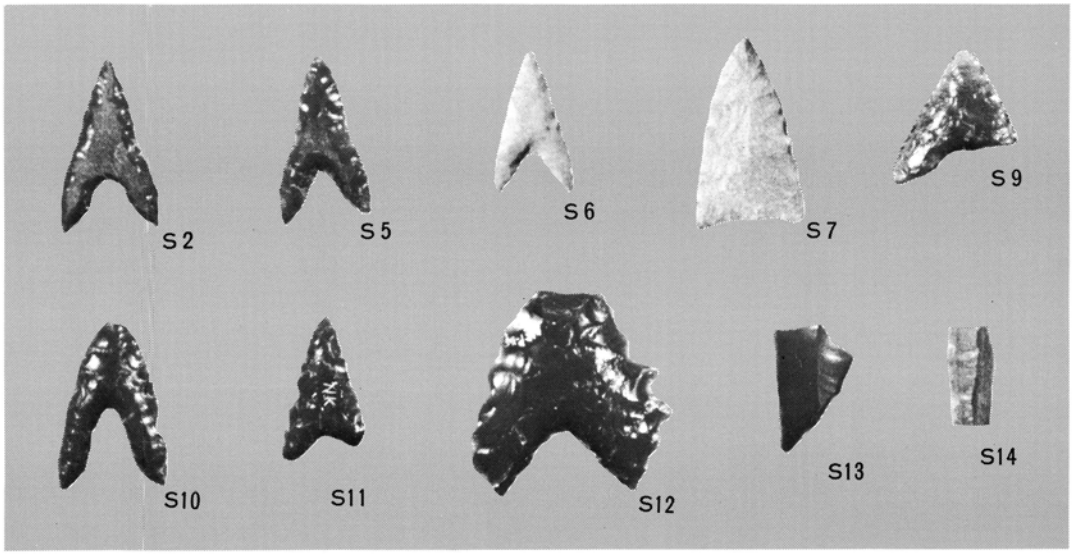
1号・2号住居址出土遺物（1/3）

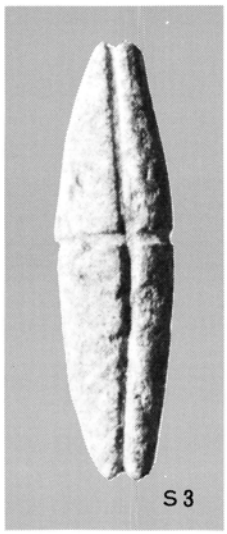


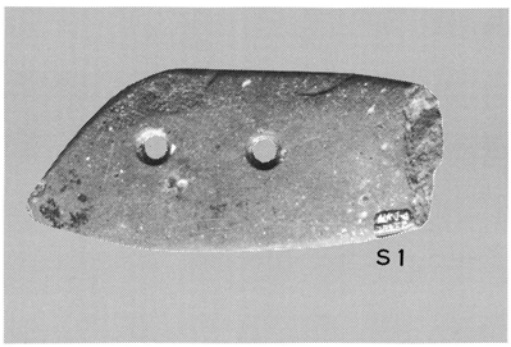
2号・3号・4号・5号住居址、弧状溝出土遺物（1/3）

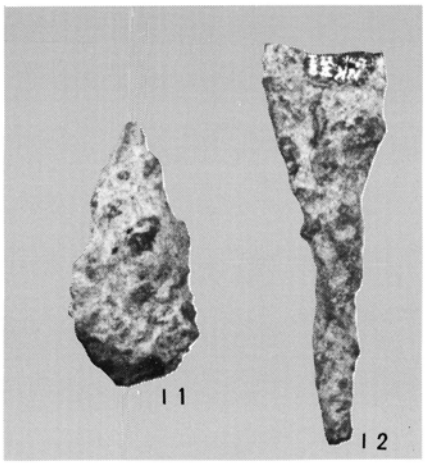


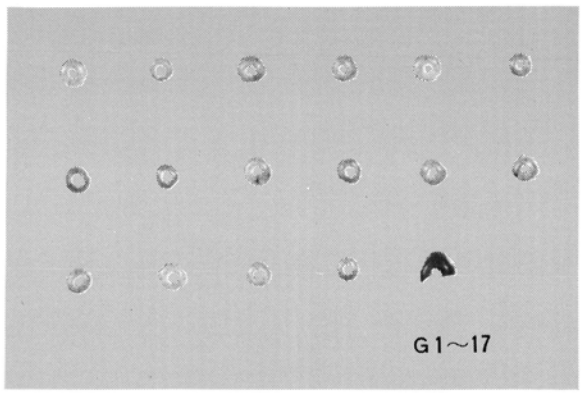
コの字形溝、3号建物、各ピット出土遺物（1/3）











各遺構出土石製品・鉄製品・ガラス製小玉
S1(2/3)　S2～S14、I1・2、G1～17(1/1)

原前田遺跡の調査

1．はじめに

1）調査に至る経過

原前田遺跡は，福岡市西区原6丁目 826番地－1，2に所在する。

昭和54年10月，当該地に共同住宅建設計画が申請され，昭和55年3月に試掘調査を行った。その結果，当該地に奈良～中世に至る迄の生活址の存在を確認した。

上記の試掘結果に基づき，原因者の真鍋義弘氏と協議を行い，国庫補助と原因者負担の費用で発掘調査を実施する事になった。発掘調査は，昭和55年7月4日から8月2日迄実施された。調査期間は約1ヶ月を要した。発掘調査対象面積は1168㎡である。

調査組織

調査委託者　真鍋義弘

調査主体者　福岡市教育委員会　文化部文化課埋蔵文化財第2係

調査担当　山崎龍雄（発掘調査担当）岡島洋一（調査事務担当）

調査協力者　照栄建設株式会社

山根義輝，阿部典弘，山口勝巳，井上昭野，工藤千鶴子，小山芳子，近藤富子，生嶋カヨ子，富永しず子，西尾たつよ，真子昌子，真鍋マチ代，真鍋陽子，油座美弥子，堀内郁子，花田早苗，原秋代。

横山邦継，井沢洋一（福岡市文化課）

2）立地と環境

原前田遺跡は，福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）で示された原遺跡群の東端にあたる。原遺跡群は，早良平野のほぼ中央，金屑川とその支流の稲塚川によって形成された沖積平地に所在する。当地域周辺は，低位丘陵を中心とする微高地に多くの遺跡が存在する。西には有田遺跡群，北に藤崎遺跡，西新町遺跡，南に原深町遺跡（Fig. 1，№5）次郎丸遺跡，鶴町遺跡，東に飯倉遺跡等が存在する。

原遺跡群は，1975年，79年と過去2度調査が実施されている。

1975年に実施された原談儀遺跡の調査では，縄文時代最終末期，弥生時代前期末から中期初頭，古墳時代前期の溝状遺構，及び柱穴群を検出している。[註1]

1979年に調査された原小園遺跡では，弥生中期頃の溝，及び奈良，平安時代以降の溝や生活址を検出した。

以上のことより両遺跡をのせる原の低位台地が，縄文，弥生時代以降絶え間なく生活空間として利用されていた事が判明した。

原前田遺跡は，原談儀遺跡より東へ約 150m，原小園遺跡より南へ約 100m隔てた地点にあ

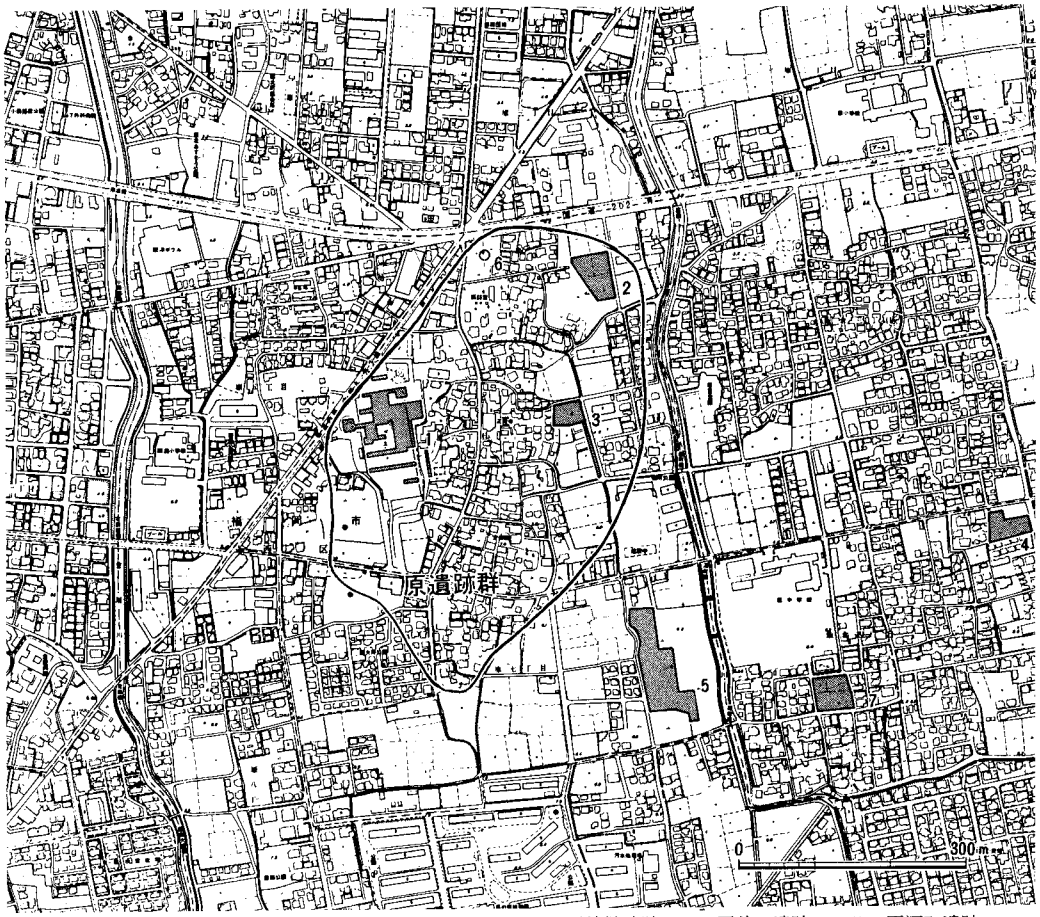
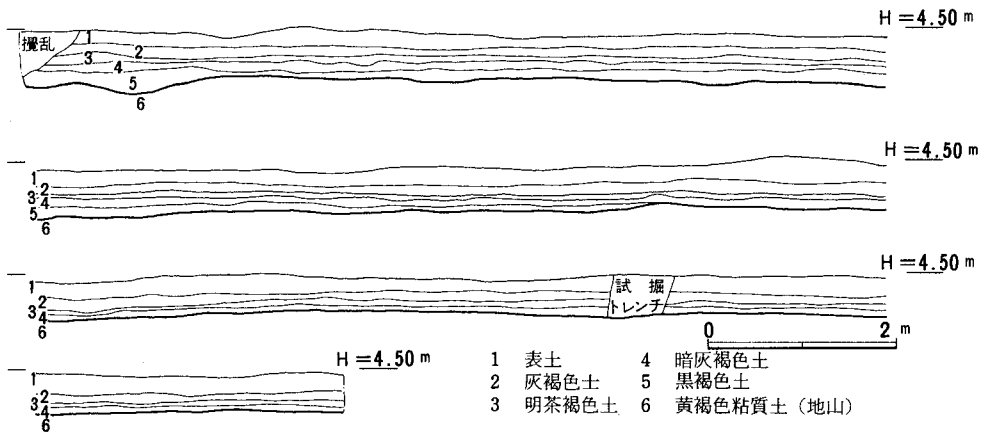


Fig. 1　周辺地形図（1/10000）

1　原談儀遺跡　3　原前田遺跡　5　原深町遺跡
2　原小園遺跡　4　飯倉向江遺跡　6　原1号墳（消滅）
7　昭和55年試掘調査（縄文時代終末期の夜臼式土器の包含層）



1　表土　4　暗灰褐色土
2　灰褐色土　5　黒褐色土
3　明茶褐色土　6　黄褐色粘質土（地山）

Fig. 2　北壁土層断面図（1/80）

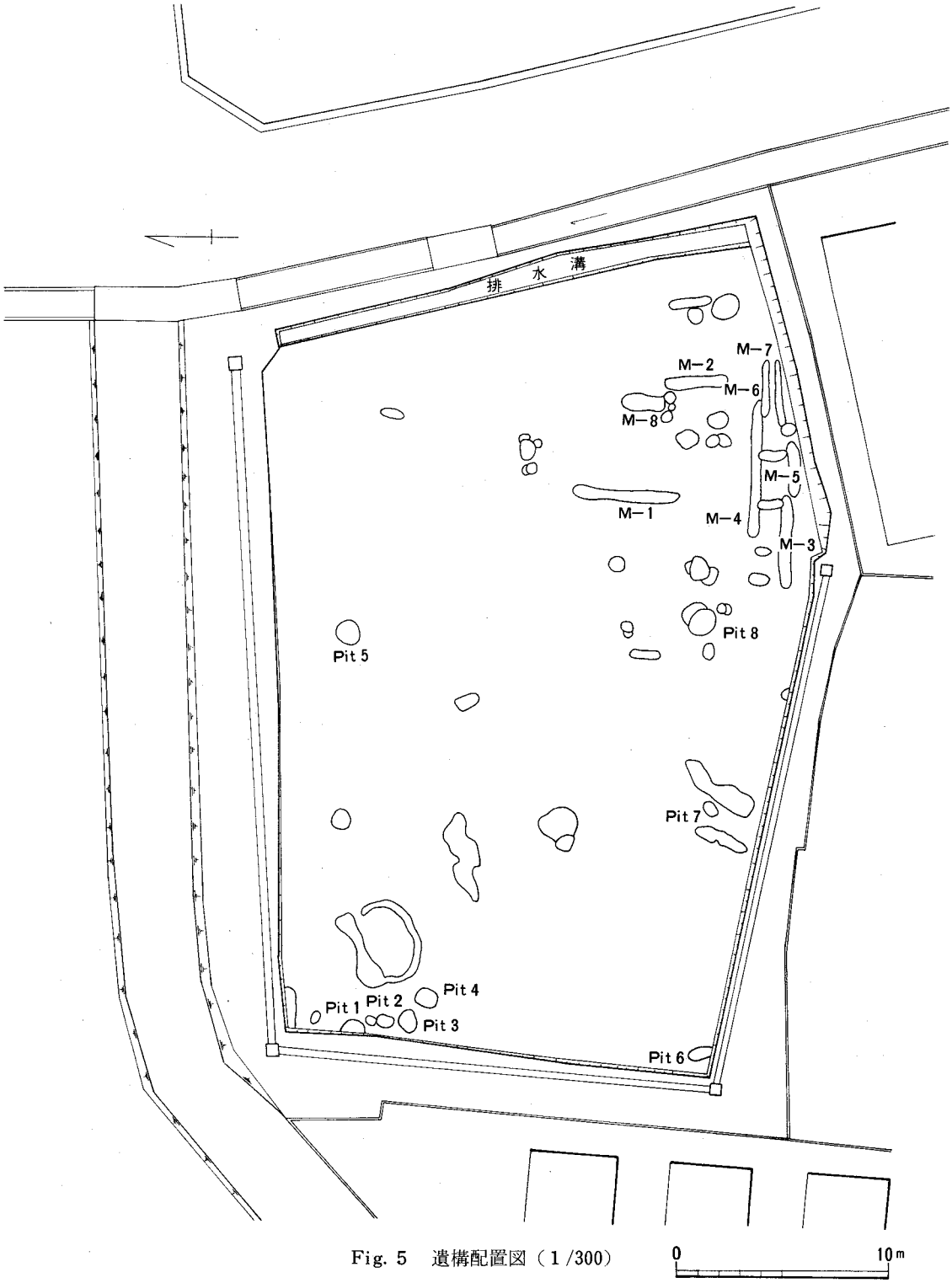


Fig. 5　遺構配置図（1/300）

る。約 100m東に稲塚川が流れ，西側が原の集落に接する。標高は4～5mを測り，集落より 0.5m程度低くなる。台地縁辺の緩やかな斜面に立地する。

2．調査の記録

1）調査の概要

発掘調査は，昭和55年7月4日より開始し8月2日に終了した。実働日数14日である。調査中異常な長雨にたたられ，排水などに無駄な労力を費したが，予想外に遺構の検出が少なく，ほぼ順調に調査は終了した。出土遺物は細片が多く，その量もわずかであった。

土層（Fig. 2）第1層，表土，第2層，灰褐色土(鉄分を含む)，第3層，明茶褐色土，第4層，暗灰褐色土，第5層，黒褐色土，第6層，黄褐色粘質土（地山）の層序になる。第5層は，遺物をほとんど含まないが包含層に相当し，東側半分は削平される。第6層は，場所によっては，砂礫を混え，その部分では湧水がひどい。

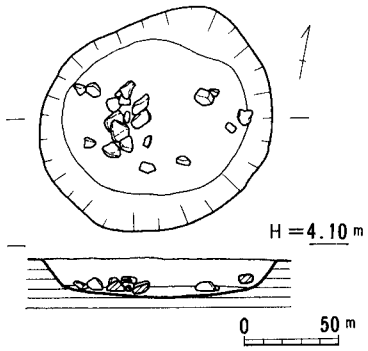


Fig. 3　Pit 5実測図（1/40）

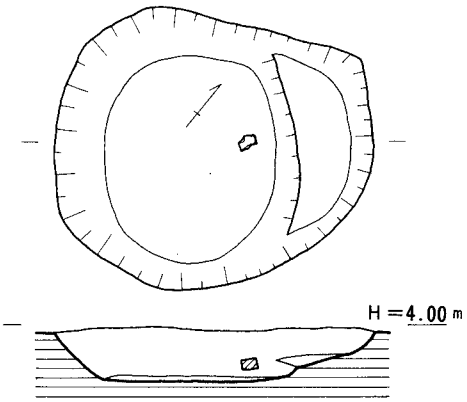


Fig. 4　Pit 8実測図（1/40）

2）検出遺構（Fig. 3～5）

調査区域の西側及び南側を中心に，Pit及び溝状遺構を少数検出した。遺構とした中には，地山の汚れのようなものもあり，明確な遺構と言えるものは更に少ない。

Pit，いずれも直径50cm以上を測り，大型である。Pit 1～4は北西隅にまとまって検出された。

Pit 1～4，1は直径1.2m，深さ22cm，半分は西壁にかかる。2は0.80×0.69m，深さ8cm，3は1.02×0.9cm，深さ19cm，4は1.13×1.03m，深さ8cmを測る，いずれも上半部を削平されたためか浅く，平面形は不整の円形を呈す。Pit 3は床に小円礫を敷く。黒色粘質土の覆土中に，土師器や磁器の小片を含む。Pit 1よりFig，6－1～3，Pit 4よりFig 6－4～8が出土した。Pit 5，1.27×1.10m，深さ23cmを測り，平面形は略円形を呈す。床面は平坦で小円礫を敷く。暗茶褐色粘質土の覆土中より，土師器や須恵器の細片が出土した。Pit 6，南壁にかかって検出された。長さ1.18m以上，幅0.52m，深さ12cmを測る。形態は細長く，溝かもしれない。覆土は黒色粘質土で，中に10～20cm前後の円礫を含む。遺物は含まない。Pit 7，0.8×0.55m，深さ9cmを測り，楕円形を呈す。中に弥生時代の甕棺の破片(Fig 6－10)が流れ込んでい

た。Pit 8，1.52×1.32m，深さ28cmを測り，平面形はやや楕円形を呈す。床面より5cm程浮いた状態で長さ10cm前後の方形の割石を検出した。遺物はほとんど含まない。

溝状遺構1～8，主に南西側で検出された。全体的に遺構の深さは10cm～20cm前後と浅く窪む程度である。覆土は暗灰褐色粘質土と新しい。少量の磨滅した土器細片及び小円礫を含む。当地の水田耕作に関連するものであろう。

3）出土遺物（Fig－6）

北西隅のPitを中心に出土した。遺物は細片が大半で，図示しうるものは少ない。

土師器（1，2，4～9），1，2，皿の破片である。底部は回転糸切り離し。1は復元口径8.8cm，器高 1.0cm，2は復元口径13.4cm，器高 2.3cmを測る。共に色調は明褐色，胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好。4，杯の底部片である。底部は回転ヘラ切り離し。体部は平坦な底部から内弯気味に立ち上る。体外面はヘラ磨き仕上である。色調は暗灰褐色を呈し，胎土は良質，焼成は良好である。5，6は杯の底部片。底部はヘラ切り離し。体部は底部から丸味を持って

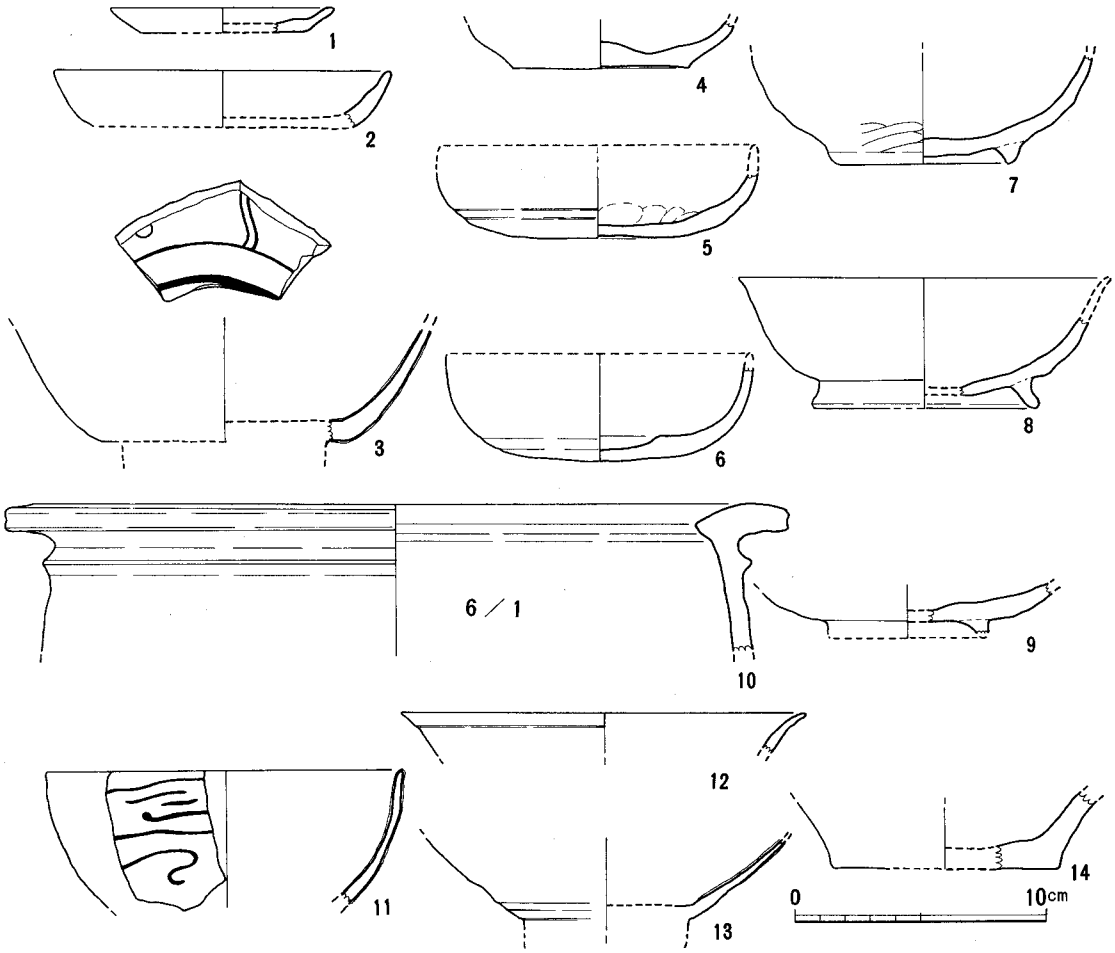


Fig. 6　遺物実測図（1/3．10：1/6）

伸び，口縁端部は直立する。全体にナデ調整を加える。5は底部に板目が，内底面に指頭圧痕が残る。色調は5が明茶褐色，6が明赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好。7～8•9は高台付椀である。7は基部が太い嘴状の高台が付く。体部は内弯気味に立ち上る。体外面下半に斜方向の粗い磨き，それ以外は横方向の丁寧なヘラ磨き仕上である。底部はヘラ切り離し後ナデ調整。色調は外面灰褐色，内面黒灰色を呈す。胎土は良質，焼成は良好。うち黒土器である。8，外方にハの字状に開く，細くやや高い高台を持つ。口縁端部は外反気味に丸くおさめる。内外面は横方向の丁寧なヘラ磨き仕上。器表は内外面とも真黒に燻される。胎土は良質，焼成は良好。復元口径14.5cm，器高 5.3cmを測る。いわゆる黒色土器である。9底部に直立する高台が付く。高台内面と底部の境はなだらかである。全体に磨滅がひどい。色調は外面明赤橙色，内面黒灰色を呈す。胎土は細砂粒を含む。焼成はやや不良。

磁器(3，11～13)，3，内外面に淡緑色の釉が厚目に施され，器表に貫入が入る、青磁椀の破片である。内面には花文と思われる暗紋が入る。胎土の色調は灰白色を呈し良質である。焼成は良好堅緻。11，青磁椀の口縁部片。口縁部は体部より緩やかに直立し，端部を丸くおさめる。外面にヘラによる暗紋が入る。内外面に淡緑色の釉が厚めに施される。胎土は灰白色を呈し良質である。焼成は良好堅緻。復元口径14.0cmを測る。3，11とも竜泉窯系の青磁である。12，13，白磁椀の口縁と底部の破片。12，口縁部は外方へ強く開き，端部を鋭くおさめる。外面は口縁部迄ヘラ削りを加える。13は包含層出土である。体部は底部から開き気味に伸びる。器壁は薄い。内底面と体部の境迄施釉される。共に乳白色の釉が薄目に施され，胎土は灰白色を呈し良質。焼成は良好。

弥生式土器(10，14)，10，甕棺の口縁部の破片。口縁直下に一条の三角突帯を持つ。調整は全体に磨滅し不明である。焼成は良好堅緻。胎土は粗く1～2mmの砂粒を含む。復元口径62.4cmを測る。中期中葉に比定出来よう。14，甕の底部片である。全体に磨滅がひどい。色調は淡紅色を呈す。胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成は良好。底部の形態から後期に比定出来よう。

4）まとめ

当遺跡は，台地縁辺の緩斜面に立地するが，すでに削平を受けており，包含層は西半分にしか存在していない。よって遺構は，包含層の残った西側に偏って検出された。

遺構の性格は，明確に判断しえないが，小円礫が床面に敷かれるPitなどは，根石を伴った柱穴の可能性がある。

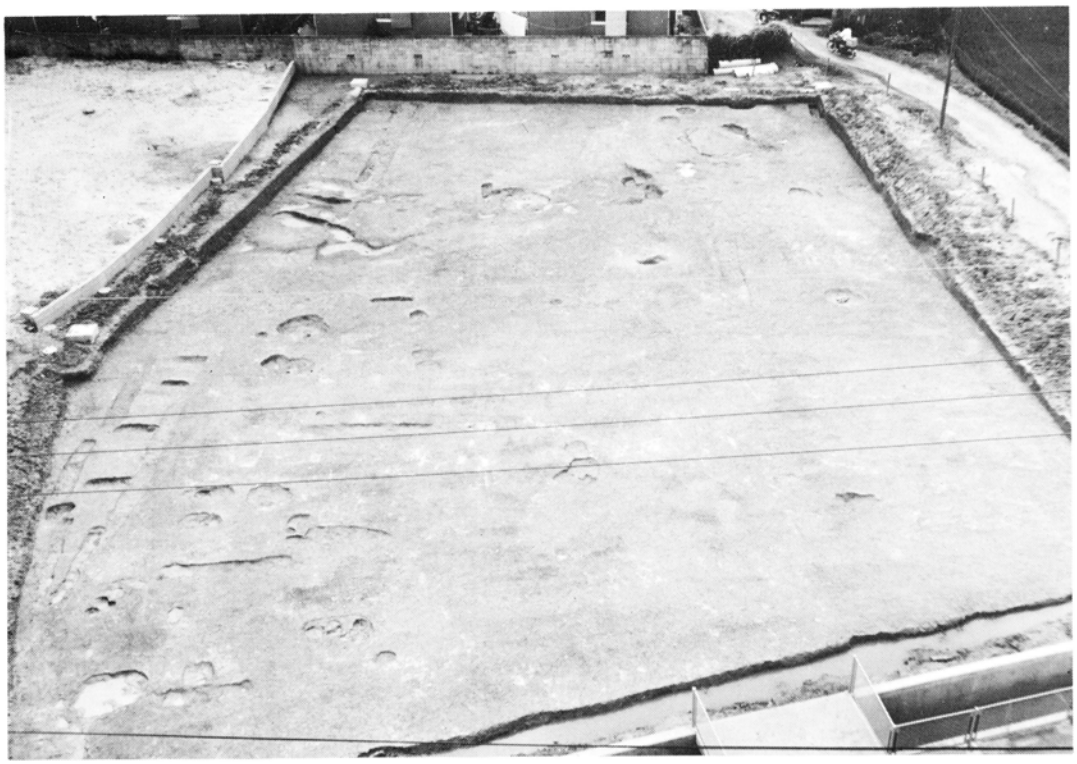
遺構の年代は，遺物量が少ないため，その決定は難しいが，Pit 1～4出土の遺物から10世紀から12世紀頃の間と思われる。

遺構の中心は，検出状況から西側の原の集落地内に存在すると推察出来る。

以上が今回の調査で，知り得た点である。原遺跡群の具体的な性格等の検討については，今後の同地区周辺の調査に期待したい。

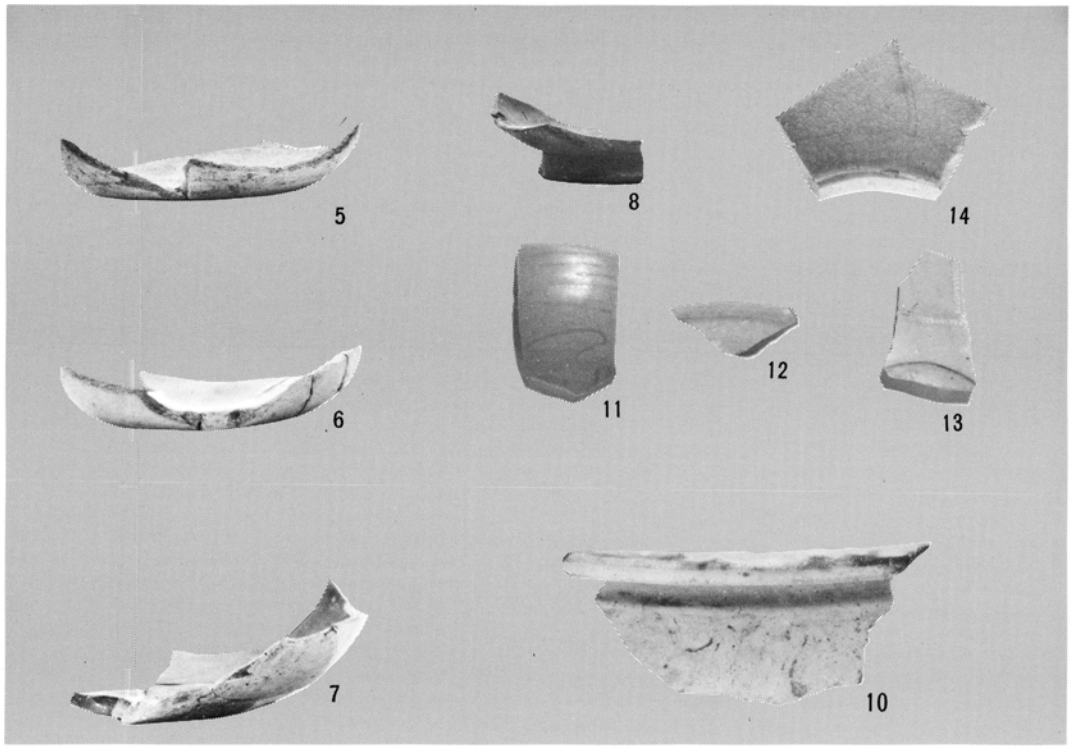
註1．福岡市立歴史資料館　「福岡平野の歴史，緊急発掘された遺跡と遺物，原始時代～江戸時代」1977

（上） 調査前全景



（下） 遺跡全景

（上） 遺構検出状況（西北隅）



（下） 出土遺物

付図. 野方勧進原遺跡遺構配置図（1 /200）

福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
— I —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集

1981年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印刷　株式会社チューエツ

福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集

1981

福岡市教育委員会